

---

# 律の兄貴やってます ~ 拝啓、前世の家族へ ~

あなか15号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

律の兄貴やってます ㄋ 拝啓、前世の家族へㄋ

### 【Nコード】

N2091T

### 【作者名】

あなか15号

### 【あらすじ】

けいおん！の転生物です！！  
ド素人ですが、暇つぶしに読んでくれたらあなか15号は嬉しいっす。

駄文ですが、よろしく願います。

## 一話！

初めまして、こんにちは。いきなりですが、私は二次小説でよくある転生者です。

いきなりこんなこと言われても、正直「え？何言つてのこいつ？」  
って思われるかもしれませんが……事実なんですよ。

それを証拠に目をつぶれば前世の記憶がありありと脳裏に焼き付くんです。

私は、三兄弟の長男でした。よく次男と喧嘩して羽交い絞めにされたり、三男にプロレス技の実験台になったり、弟たちに悪戯して仕返しにボディーブロー食らったり……

あれ？なんか弟たちにボコボコにされた記憶しかな思い浮かばない

……

オホン！！と……とにかく、私は前世の記憶があるのですよ。

それに気づいたのは小学1年のころです。私が双子の妹と公園で遊ぶ約束し、先に行って待っていました。そこにはブランコに乗って本を読んでいる女の子がいました。

ちよつと昔話……

「わあ……」

その女の子を見た私は……僕は心を奪われました。一目ぼれとはまさにこのこと。その女の子はとても絵になっていて、僕は彼女に見られていた。

「…………ゴクリ」

話しかけようか、かけないか……僕は迷っていました。綺麗な彼女をもっと見ていたい、けど話しかけたい、そしてお友達になりたい。

「…………よしー」

僕は胸をドキドキさせながら、一步一步彼女に近づく。けど、近づくことに不安が過る。無視されたらどうしよう……なんて話しかければいいんだろ……ちゃんと話せるのか……

こういうとき、妹は何の不安もなく話しかけることができるのだろう。アイツ、どうしてこんな時にいないんだ！いつも可愛らしく僕の傍にいるのに……って僕が先に家を出てきちゃったのが原因なのだが……

「ん？」

「ひよー！……」

彼女は僕に気づき視線を本から外し、僕を見ていた。そして目が合い、僕は思わず変な声を上げてしまう。

「…………え……えっと……」

な……何か話掛けなければ！えっと、まずはあいさつから言って、それから……そのあとは……ああああ……！

って……！なんか彼女どんどん怯えた表情になってるんですけど……！怖がつてる……！いきり近づいてきたから怖がつてるよ……！なにか……！なにか話しかけねば……！

「な………何の本読んでるの……！」

「ひっ!」

しまったああ!! 緊張しすぎて声が大きくなっちゃったああ!! そして、余計怖がらせちゃったよ!! ああ、なんか小刻みに震えてるよ… なんか子リスみたいで可愛い… って僕は何を考えてるんだ!!

「ご…ごめんね! いきなり、大声だして。なんの本読んでるか気になっちゃって…」

「ヒック…うう…」

「ぼ…僕本好きなんだ。だから、気になりすぎて興奮しちゃって…」

「…え? ……ご本…好きなの??」

「え! ……うう…うん!! 大好きだよ!! もう毎日読んでるよ!!」

嘘は言ってない。うん、嘘言ってない。漫画も立派な本です。

「そう…なんだ」

「うん。そうなんだ!」

ふう、なんとか最悪の危機は回避してみた。怯えた顔が少しだけ和らいでいる。ちょっと嬉しそうにもみえる。

これは行けるかも。

「それで、どんな本なの?」

「うん…これだよ」

彼女は一旦本を閉じ、俺に表紙を見せてくれた。その本は絵本でタイトルは…

「『ぐりとぐらとくるりくら』?」

「うん。パパとママに初めて買ってもらったご本なの。すっごくお

もしろいの!」

彼女は嬉しそうに本を抱きしめた。それと同時に笑顔がこぼれる。なんて可愛い笑顔なんだ……

「読んだことある?」

「えっと……その本は読んだこと……??」

あれ??なんだろう……読んだことないのに……ものすごく見覚えある。どうしてだろう。どこで見たんだろう。

「……どうしたの?」

「えーいや、なんでもないよ……ごめん。僕その本読んだことないや」

「……そっか……」

彼女はちよつと残念そうな顔をした。そんな顔も可愛いとか思ったが……そんなことより、そんなことよりも!!このモヤモヤはなんだ!……!

どこで見た。家?妹の部屋?お父さんの部屋?教室?学校の図書室?友達の家?

「じ……じゃあ。読んでみる?面白いよ」

「んん??……え?いいの?」

「うん!いいよ」

嬉しそうに僕に本渡す。やっぱり可愛い……じゃなくて!!

読めば何かわかるかも。そう思い、僕は本を受け取る。

絵本だけあってページ数が少ないから、すぐに読める。絵本だし、サツと。

「……………」

サッと読む。そのつもりだった。

「……………」

けど、僕は「文字」「文字」、丁寧に読んでいく。

「……………」

ページをめくる度に、「この本を見たことがある」「という信憑性が高くなっていく。

僕は…………この本を。

「……………」

僕は…………俺は…………

「……………」

「えー……ど……どっしたの？」

俺は…………

この本を知っている。そして、俺はすべてを思い出した。

「ど……どっして、泣いているの？」

「えっ？」

どうやらいつの間にか泣いていたらしい。そういえば、あの頃も涙

腺弱かったなあ〜。

「だ…大丈夫??」

「うん。大丈夫だよ！あはは、面白すぎて涙出てきちゃったよ!!」

「え？泣くほど面白かったの？？面白いと泣いちゃうの??」

「そうだよ〜。面白いと泣いちゃうんだよ!!」

すべて思い出した。あの頃の…前世の記憶を。

俺が三兄弟の長男であること。兄弟仲良かったこと。自分がゲーム・漫画・アニメが大好きだったこと。高校1年から彼女できなかったこと。現役に一流大学だけ受けまくって落ちて一浪したこと。弟2人はリア充だったこと。就職が中々できなかつたこと。そして…就職決まってすぐの23歳で死んだこと。

「クスッ。面白いと泣いちゃうなんて変なの」

「ええ〜そうかなあ〜？」

「フッフ」

やべ〜〜やっぱ笑うとめっちゃ可愛い。ちょっとシリアスな展開だったけど、そんなのどうでもよくなるくらい可愛い。前世のことを考えるとなんか変態っぽいけど、そんなのどうでもいい。前世もなかなかの変態だったからな。ロリじゃなかつたけど…

「そんなに面白かったのなら、そのご本貸してあげるよ」

「え？けど、この本大切なものなんでしょ??」

「うん。そうだよ」

「んじゃ〜駄目だよ。大切なものを他人に貸しちゃだめなんだよ?」

「え？そうなの?」

「そうなの」



大切なものは、大切に自分で持つておかないと。

「それじゃ、また明日今度は違う本持つてくるね！まだ面白い本いっぱいあるから！」

ワクワクとした表情で言った。ついさっきまで怯えていたのに。

「わかった！それじゃ明日同じ時間で公園に待ち合わせね！！」  
「うん！！」

彼女はブランコから降り、「またね」と言って公園の出口へ向かった。

出口で彼女はこちらに振り返り、笑顔で手を振ってくれた。俺もそれを笑顔で手を振ってかえした。彼女は満足した表情で公園から出て行った。

「ふう〜」

俺は小さく息を吐く。

まさか、自分が前世の記憶を持っていたなんて。てか、こういうのって死んだときに神様が出てきて「ごめん。ミスって殺しちゃった」というのじゃないの？？そしてチートな能力を2〜3個もらって、原作ブレイク！！とかやつちゃうだと思っただけけど…

「てか、俺って結構冷静だな…。前世の記憶があるって中々怖いはずなのに…」

まあ〜思い出したときは胸の中がこみあげてくるものを感じましたよ。泣いちゃったし。てか、大声で泣きたかった。

『お〜い！！に〜ちゃん！！』  
「ん？」

どうやら我が妹が来たようだ。いつも元気な妹だ。まるで前世の弟たちみたいだな。

……あいつら、元気かな

「兄ちゃん！どうして先行くんだよ！！待っててって言ったじゃん！！」

「先に行って遊び場所を取っておこうと思ったんだよ」

ホントはお前を脅かそうとしたんだけどね。

「え？そうなの？…って兄ちゃん、目赤いよ？？どうしたの？」

「フ…過去を振り返ってたのさ」

「何言つての？兄ちゃん？？」

「そんなことより！！我が妹よ！！！何して遊ぶ！！！！」

「えつとねえ！！えつとねえ〜！！！！」

俺と妹はお母さんが迎えに来るまで、ちょ〜遊んだ！！

怒られたけど……

とまあ、こんな感じで前世の記憶を思い出したわけです。

そのあといろいろ戸惑いはありましたが、楽しく現世を過ごしていきます。あの可愛い女の子とはなぜか妹と一緒に家に現れ、びっくりドッキリしたり（なんか無理やり連れてこられたらしい）、実は同じ学校の子だったり、僕を女の子と勘違いしたり（確かに妹と似てるけどさ、双子だし）、彼女が作文発表するのが嫌で公園で僕に泣

きつてきたり（あれはキョン死ぬかと思った）、その作文がメルヘンチックだったり、妹が彼女に相手に舐められないための秘訣を教えたり……中学に入ってから3人でお花見したり、お祭りいたり、花火したり、映画行ったり、そうそう！妹がバンドやるうなんて言い出したり、3人同じ高校しようと一緒に高校選びをし、妹が必死に勉強したり、俺と彼女は勉強を教えたり……そして見事3人同じ高校に合格しお互い喜び合ったりした。

「ふんふんふん」

俺は鼻歌を歌いながら、愛用のギター・ESPのメンテナンスホライズンシリーズをしている。

高かったんだよねえ〜これ……めっちゃ高かった。死ぬほど金貯めましたマジで。欲しいものを我慢して我慢して……うううう！！ホントつらかった！！

「よし！！完璧！！！！」

メンテナンス完了。新品みたいに綺麗だ。もうあれだね、メンテはプロレベル行ってるね。

あ、ちなみにギターのレベルも相当いってますよ？自分で言うのなんです、めっちゃ上手いですよ。キラン！！

「兄貴い〜〜〜！！もう行くよお〜〜！！」

おっと、我が妹が呼んでるぜ。入学式早々、遅刻するわけにいかないな。

「じゃな、相棒。行ってくるぜ！！！！」

愛用のギターに一言行つて部屋をでる。この光景を見たら「ちよつとお前変じゃね？」的に思われかねないが、自分の部屋だから問題なし!!!!

「今日から高校かあ」

前世を合わせると2回目の高校生活。

「悪い。待たせた」

「まったく、遅刻したらどうするんだよ、兄貴」

「また、ギターのメンテナンスしてたんだろ？慶はホントにギター大切にしてるよな」

「当たり前だろ、アイツは俺の相棒なんだからな！大切にしないわけないよ」

前世の高校生活は最高に楽しかった。だから、ここでも……

「んじゃ、ギターオタクも来たことだし行きますか」

「クスツ、そうだな」

「おいおい、なんだよギターオタクって……」

俺の前を歩き出す2人。

「あ、そうだ二人とも」

「ん？」

「なに？」

俺は思い出したように前を歩く2人を呼び止め、そして言った。

「楽しい高校生活にしようぜ!!! 律! 漣!!」

「ああ〜そうだな！」

「あつたりまえじゃん!!! 3人いればいつだって楽しいって!!!」

俺は二人の間に入り、並んで歩き出す。

いつも元気な双子の妹、田井中律。

幼馴染にして俺の初恋の相手、秋山澪。（現在もホの字です）

そして、俺

前世の記憶を持ち、『けいおん!』の世界の転生者、田井中慶。

「さてさて、放課後のティータイムが楽しみですなあ〜」

「ん?何か言ったか?兄貴?」

「放課後が何?」

「いや、放課後にドーナツ食べたいなあ〜って思ってたさ」

「好きだねえ〜ドーナツ」

「クスッ。じゃ〜いつもの放課後にドーナツ屋行こうよ」

「賛成!!!」

そういつて俺たち三人は笑い出す。

これから楽しいことがあると思うと、俺たちは笑わずにはいられなかった。

一話！（後書き）

できたら感想などいただけると嬉しいです。

二話！！

どもども、「けいおん！」の世界に転生し、田井中律の双子の兄として生を受けた田井中慶です。最近、原作知識は日が経つことに曖昧になります…

共学となった桜ヶ丘高校の入学式。現在、クラス表を双子の妹の律と幼馴染兼絶賛ホの字の漣と3人で見ている。

「えつと…おれはつと…」

「あ！！あつた！！！」

「え？どこ？」

「ホラ、あそこ！」

「あ、私も同じクラスだ」

「また3人一緒だな！！！」

確か小2から3人一緒だな。律は小1のころから漣と一緒にだったけど……

「なんかここまで3人一緒だと仕込まれている感じがするな……」

「クスツ、確かに」

「いいじゃんか。さ！行こうぜえ〜！！！」

律の一言で俺たちは自分のクラスへと向かう。しっかし…

女子ばっかだなあ〜。いくら去年まで女子高だからといっても男子が少ない気が…てか俺しかいなくなね？

「何キヨロキヨロしてるんだ？慶？」

「ん？いや……」

「どうせ、『かわいい子いねえ〜かあ〜。ぐへへへ』って具合に探

つてたんだろ??」

「おい…お前は実の兄を変態に仕立てたいのか……」

「はっはっはあく〜! そうだよなあ〜兄貴はみ…(ガシッ!!) イタ  
イタイ! ! !」

「あまり調子に乗るなよ?」

「ごめん! ! ! ごめんなさい! ! ! 許してえ〜! ! !」

つたくこのバカ。

「イテテ……兄貴のバカ力……」

「慶は相変わらず力強いな。腕は女の子みたいに細いのに」

「まあ〜一応男だからな」

筋トレもしてるからな。腕立ても腹筋も毎日100回してるから筋肉はかなり発達しているハズ………なんだけど、なぜか腕が細い………まったく太くなる気配がない。てか華奢だ。だから、小学生のころは舐められたもんだ。『女男!』つてよくからかわれたな。

「で? どうしてキョロキョロしてたんだ?」

「ああ〜、なんか男子が俺以外見当たらないと思ってさ」

「男子???」

そういつて2人はあたりを見渡す。

「確かに……」

「あれじゃないか? もう教室にいるとか?」

「もしかして兄貴しかいないとか?」

「いや、さすがにそれは……」

去年まで女子高だぜ?? 女の子いっぱいだぜ?? 女子自当てで入学



してくる男子がいてもおかしくないハズ。桜ヶ丘女子は結構可愛い子集まる学校で有名だったからな。それかどっかの生徒会副会長みたいに家から近いからとか？けど偏差値が結構高いからな。入りにくいのは否めない。否めないが、それでも最低10人はいるハズ。フツ…俺の読みはよく当たるんだぜ？伊達に将棋初段は持ってないぜ！！

「……先生……もう一度言ってください」  
「ええ〜。男子は田井中君だけです」

んなアホなあ〜！！俺一人！？何！！何すか、この展開！！！共学の高校に男子一人って……どこのIS学園ですか！！！！

「ホ…ホントに俺一人なんですか？」  
「ええ〜。願書は田井中君以外に20人弱いたんですが、田井中君以外みんな合格点に届かなかったんですよ」

……………わお

「あの〜それっていろいろまずくないですか？」  
「大丈夫ですよ。なんとかかります。それに田井中君女の子みたいですよし……」

俺は女の子みたいだけど、正真正銘男だからね！！！それじゃないか！！女装しろってか！！男やめろってか！！！！

「（女の子みたいだって…ぷぷぷ）」

律…てめえ〜あとでデコピンな…

「それじゃ入学式が始まりますから講堂に移動しますよ」

ちなみに俺の担任は優しそうなおばあちゃん先生の女神山めがみやま 月先生つきです。年寄ながら、古風ある美しさを兼ね備えていて、桜高女教師の「三人天女」の筆頭で、その美しさと優しさから教師からも生徒からも大変人気がある。

「軽音部見に行こうぜー!!」

「…でかい声だすな…」

「なんだ？兄貴まだ女の子みたいって言われたこと気にしてるのか？？」

………うるせえ〜

「ホラ！元気出して！気を取り直して軽音部見に行こうー!!」

「わかったよ…行くよ…」

「よし！…澪も誘うぞー!!」

「澪お〜!!…!!軽音部行こうぜー!!」

「え？軽音部？」

「そそ！」

「……慶も行くの？」

「まあ〜な。俺ギター弾けるし」

「漣もベースできるだろ！だから行くこつぜー！！」

「えっと…私、もお〜入部届に文芸部って書いちゃったし…」

ホラっと言つて俺たちに入部届を見せる。ふむ、確かに書いてるな。

「えっと…だからさ、よかつたら慶も文芸部にしないか？」

「ん？」

「ホラ、慶も本好きだろ？きつと文芸部も慶に合つと思つよ。……」

そ、それに私、慶の書いた小説また読みたいし…」

「漣……」

漣と二人で……文芸部……

絶賛慶は妄想中

……

いい！！すごいいい！！

律には悪いがここは漣と文芸部に！！

……ん？律？漣の入部届を穴が開くほど見てどうした？そんなにシヨックだったか？？

「ど…どうだろう？」

「ああ、悪くないな」

「よかつた！！んじゃさっそく入部届を……」

“ピリ〜〜”

「「ああ〜〜〜〜！！！！」」

「「よお〜〜〜し！！！！軽音部に行くぞお〜〜〜！！！！」」

「「じ〜〜〜し〜〜〜！！！！」」

「え？廃部？」

「正確には廃部寸前ね」

その後、取り敢えず律に拳骨を食らわせてから、軽音部の詳細を職員室で山中さわ子先生に聞いていた。

ちなみに山中さわ子先生も桜高女教師「三人天女」の一人です。

「昨年度までいた部員はみんな卒業しちゃって今月中に5人入部しないと廃部になっちゃうの」

あれ？5人だっけ？4人じゃね？の？？

「それじゃ、がんばってね」

と言ってさわちゃん先生は去って行った。

「……………」

「きれいな先生だったなあ」

「さすがは桜高『三人天女』の一人だな」

チラッと律を見ると目が点な状態……………

まあ入りたかった部活がないって結構ショックだからな……………

「でも、廃部なら仕方ないな、私と慶は文芸部に……………」

「そうだな」

律には悪いがここは諦めてもらうしか……

“むんず”

「りりりっ？」

「誰もいないってことは今入部すれば私が部長……悪くないな」  
（ニヤリ）

「……………」

拝啓、前世の家族へ

これから部員探しです……。

二話！！（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。感想、アドバイ  
スなどいただけるとうなかな15号は嬉しいです。

三話……！（前書き）

短いですが、お願いします。

三話!!!

「あの〜見学したいんですけど…」

「軽音部の!!」

音楽室で律が「入部希望者を待つ!!」という何とも受け身な宣言してすぐのこと…

おっとりしてとても可愛い女の子が入ってきた。

ふむ…漣と同等のレベルの高い子が現れたもんだ。とくに沢庵型の眉毛がなんとも可愛い。……………確か…えつと…むっちゃんだっけ? 麦吹 琴だっけ? あれ? なんか違うような…

「いえ、合唱部の……………」

「軽音部に入りませんか? 今部員が少なく……………」

おいおい、そんなに強引にやると…漣に…

「コラ!!」

怒られるぞ?

「そんな強引な勧誘したら迷惑だろ!!」

「そうそう。ちゃんと相手の気持ちも考えないと」

「うう~~~~ (泣)」

「それじゃ私も行くから。慶、行く?」

「ん? ああ」

「漣!!! 兄貴!!!」



んだよ？

「あのときの…あの時の約束は嘘だったのか!？」

「……………」

「あたしがドラムで、漣がベースで、兄貴がギターで……………ずっとずつとバンド組もつて!！」

「……………」

「まあ……………」

「三人でライブに行ったあの日……………」

なんか律がウルウル声で語り始める。それにむっちゃん(仮)が悲しそうな表情で律の話を聞いている。

ああ〜うん……………なんか映画の感動のワンシーンみたいだけどさ……………

「あの時の言葉は嘘だったのか!！」

「……………その回想が嘘だ……………」

「あれ? そうだっけ??？」

それって律の部屋で見たライブビデオのことってんだろ??? それを見て感化された律が……………

「律が強引に……………」

「うんうん……………」

「漣も兄貴もやるっていったじゃん……………」

「……………そうだけど……………」

「それでプロになったらギヤラは7…3…0ねって……………捏造すなッ……………」

「……………その0っておれか? おい……………」

お前は俺を奴隷にしたいのか……………

「ぷッ…くすくす…」

「…ん?」「」

「なんだか楽しそうですね。キーボードぐらいしかできませんけど、私でよければ入部させてください」

「ぱあ〜っと律の顔が明るくなる。漣はちょっと信じられないって顔をしてる。俺は…たぶん普通だ。」

「ありがとー!!これであと一人だー!!」

「私たちはもう人数に入ってるのね」

「ホントにありがとー!!えっと…」

「私、琴吹紬です」

「あたしはドラムの田井中律。こっちはベースの秋山漣」

「よろしく」

「んで、こっちはギターであたしの兄貴の田井中慶」

「よろしくな、琴吹さん。(そっか、琴吹紬か…)」

「まあ〜やっぱりお兄さんなんですね。兄貴、兄貴って言ってたからあだ名にしては変だなって思ってたんです。もしかして、双子ですか??」

「ああ〜、一卵性の双子だ」

「まあ〜ノノノわたし、双子の人初めて見ました。ホントそっくりですね!」

「まあ〜双子だからねえ。俺もカチューシャしたら律になるからな。」

「あの!握手してください!」

「え?…いいけど…」

「キャッノノノ」

スゲ〜嬉しそうに俺に握手を求める琴吹さん。  
あ、手…やわらかい…

「よお〜し！あと一人集めるぞお〜し！」

「バンドとしてはこのメンバーでできるけどね」

「パートはどうしよっか、兄貴」

「ん〜」

俺的には音の幅を広げたいから、ベースを増やしてツインベースか。  
いやバイオリンなんか入れても面白いかもしれん…サックスフォン  
……コントラバス……ボイスパーカッション……カスタネットも捨  
てがたいが……うん。でもやはり…

「ギターだろ」

拝啓〜前世の家族へ〜

琴吹紬が仲間になりました！！

### 三話！！！（後書き）

一度はやってみたかったオリ主紹介！！

#### プロフィール

田井中 慶

性別・男

身長・165cm

体重・47kg

誕生日・8月21日

好きなもの・秋山澪、妹の律、弟の聡、軽音部のメンバー、ギター、甘い物

嫌いなもの・納豆、ホラー映画、律と澪と聡をいじめる輩、

特技&趣味・将棋（初段）、スケッチ、小説執筆、作詞作曲、サッカー観戦、

料理、

#### 人物

けいおんの大ファン。前世の記憶を持つ転生者。しかし、年が経つごとに前世のことと「けいおん！」のストーリーがかなり曖昧になってきている。小1のころに公園で少女（澪）と出会い、前世の

記憶を思い出す。それと同時に少女に一目ぼれ。（その少女が秋山  
澪と知り、めっちゃ喜ぶ）

律とは一卵性の双子。

文武両道ともかなりのチートぶりを発揮。すべて得意科目で、特  
に得意なのが英語・国語・数学である。英語はペラペラ。ドイツ語  
もそれなりに話せる。

ギターの腕はプロも認めるほど（実際まだ認められていないが）。  
将棋もアマチュアではかなりの上位レベル。料理もかなりの腕前。  
律の料理も慶が教えた。甘い物には目がない甘党。甘いものを奪わ  
れると、海底火山が爆発。

妹の律、弟の聡を大切、もとい溺愛している。そして澪を心から愛  
している……がめったに表に出さない。

女装がかなり似合う。律がよく女装させようとするが、毎回拒否し  
ている。…が内心別に嫌と思っていない。なぜなら似合っているか  
ら。

四話！！！！！（前書き）

「卵性のことですが……………まことに勝手ながら、あなか15号は  
このままで行こうと思います。」

## 四話！！！！

琴吹紬が軽音部（仮）に入部して、一週間が経過した。

「んんんんん！！ケーキおいしい！！」

「この紅茶…相変わらずいい香りだな」

「うふふ。紅茶のおかわりいかがですか？ケーキくん」

「あ、もらつよ。ありがと、紬」

「あ、ちよつと兄貴のケーキ一口頂戴？」

「ああ、いいぞ。だが、俺が先に食ってからな。そして、お前の一口くれ」

紬は毎回ケーキに紅茶を自前で持ってきてくれる。もらい物らしいが、毎日のように貰えるので食べきれないらしい。見た目お嬢様だったけど、どうやら本物のお嬢様らしい。

そのケーキも紅茶も美味いんだなあ〜これが！！甘党の俺にとってはこのティータイムはまさに祝福の時だ。

……………ん？

「どうした、漣？ケーキ食べないのか？」

「もしかし、好きなケーキじゃなかった？漣ちゃん」

「いらぬならあたしが貰っちゃうぞお〜」

「待て我が妹よ。ここは平等に半分に分けよう」

“ガタツ”

……………つといきなり漣が椅子から立ち上がる。

あれか？トイレか？いや……………違うな、この表情は……………

「呑気お茶してるなあ~~~~~!!!」

……………お怒りでした。

「あれから一週間!!何もしないで毎日毎日お茶して!!あと一人入部しないと軽音部は廃部なんだぞ!!ちょっとは危機感持ちなさい!!!」

「えっと……………」

「えっとじゃない!!慶も!!」

「し…しかしだな、紬のケーキと紅茶がおいしくて…」

「ケーキくん、紅茶のおかわりどう?」

「いただきます」

「コラ!!!」

うう〜久しぶりに漣に怒られちゃったよ。

「や〜い、怒られてやんの」

「お前も…だ!!」

「イデ!!!」

「クススッ」

漣に拳骨を食らう律。その光景を見て微笑む紬。うん、笑い方してマジでお嬢様だな。笑い方にも品があるぜ……………今度絵のモデルなつてもらおう。

「でも、漣の言うとおりでな。何か策を練らないと、このままだと廃部は確実だな」

「そうだろ?だからお茶なんてしてる場合じゃないんだよ」

「ああ、そうだな。ありがとな、漣。おかげで目が覚めたよ」

「え…!う、うん。どういたしましてノノノ」



さてさて、どうするか……

「何か案がある人いるか？」

「はい！！兄貴副部长！！」

「はい、律」

「部長はあたしだから、兄貴よりあたしが仕切ったほうがいいと思いますす！！」

「黙ってる」

「……………すみません」

「はい！ケーくん副部长！！」

「はい、紬」

「チラシを学内掲示板に張るのはどうでしょう！」

「慶副部长、私もムギの案に賛成です」

「あたしもそれがいいと思いまゝす！！かつこいいイラスト描いて張ればきつと軽音部に興味を持ってくれるはずだと思います！！」

ふむ…確かにチラシを張るのはいい案、てか妥当な案だが…

「だがチラシだけじゃだめだ」

「え？」

「どうして？」

「入部届が配られて一週間がたつ。入部期間は今月まででまだ時間があるが、大半の生徒は三日以内には部活に入るか入らないか決め、そして入る生徒はもうすでに希望する部活に入部しているハズだ。

現に律も澪も紬も三日以内にはどの部活入ろうか決めていただろ？」

「確かに…」

「その通りです」

「よって、俺たちがターゲットにするのは部活に入らない生徒、帰宅部だ。だが、帰宅部の生徒はそもそも部活に興味がない。チラシ

を張つても何ら興味を示さない。中には例がいるだろうから、チラシの効果か0とは言わないが……効果は薄いだろう。だから、チラシとはまた別に行動を起こす必要がある」

「おお〜！！すごい説得力だわ！！ケーキくん！！」

「さすが慶だな！！」

「あたしの兄貴だけあるな」（モグモグ）

フツ……3人が尊敬のまなざしで見てるぜ。これぞ転生者が成せる器。

だてに転生してないぜ！！あんま前世の記憶ないけど……

「んで？別の方法ってどうするんだ？兄貴」（モグモグ）

「それをこれから話し合つて決めて……」

「……………ん？」（モグモグ）

「なあ〜……………律」

「何？兄貴」

「……………何……………食べてるの？」

「???ケーキだけど??？」

「それは見てわかる……………誰のケーキだ……………」

「兄貴のだけど？」（モグモグ）

「……………なぜ俺のケーキを食べる」

「いつまでも食べないからいらんのかなあ〜って思つて」

「……………そうか」

「うん。（モグモグ）あ、このクリーム、ラズベリーの味がする」

まったくウチの妹は、人が話してる最中に物たべるなんて。人が真剣に話してるのに。幸せそうに食べやがって……………まッ、律らしいし別にいいか。……………おいおい、漣。何をそんなに不安そうに俺をみるんだ？別に俺が楽しみにとつておいたケーキを勝手に食べたからと言つて、俺が怒る訳ないだろ？俺は律の兄で、転生者だぜ？心

は海より広いぜ？荒れることはないぞ。

………海底火山は爆発するけどね。

「何がラズベリーの味だコラ！！人のケーキを勝手に食いやがって！！！！てめえ～～の頭をラズベリー色に染めてやるうか！！」  
「ひえ～～～～～～！！！！ごめんなさい、兄ちゃん！！」  
「謝っても許されねえ～～！！それが甘い物の恨みだ！！！！」  
「け、慶！！お、落ち着け！！」  
「兄妹のとの戯れノノノ……ドント来いです！！」  
「変なこと言っていないで、ムギも慶を止めるの手伝って！！」  
「え！！私も手伝っていいの！！」  
「なぜ嬉しそう！！」

拝啓〜前世の家族へ〜

結局…チラシ以外決まりませんでした。

## 四話!!!! (後書き)

一度はやってみたかったオリ主紹介パート2!!!&用語解説!!!

女神山 月

年齢・57歳

性別・女

身長・162cm

体重・????kg

好きなもの・勉強教えること、おしゃべり、お茶

嫌いなもの・特になし

趣味&特技・合気道、将棋、囲碁、俳句

詳細

桜ヶ丘高校の教師。担当教科は国語。桜高の「三人天女」の一人。  
田井中兄妹、秋山澪の担任の先生。

優しさあり、美しさあり、気品さありと高齢になっても変わらない。  
枯れることのない桜高の華。

女性版金八先生つとってもいいほど、生徒からも教師からも大変  
好かれている。彼女を見て「教師になろう」と思う生徒は数えしれ

ず。

未婚者。

なんでも彼女が若いころ「高嶺の花、というより天界の女神」とま  
で言われるほどであり、誰も手が出なかつたらしい。（本物の女神  
ではないかという話もあるくらい……）

そして、彼女自身恋愛の関心が皆無であつた。

度々、慶と将棋を打っている。その腕前はアマチュア上位レベルの  
慶が「勝てる気がしない」「盤の上で遊ばれている」と言わせるほ  
ど。

### 三人天女

桜ヶ丘高校で人気があり、なおかつ美しさを兼ね備えた女教師に与  
えられる称号。

女神山先生が赴任した当時、女神山先生のほかに2人の美女教師が  
いた。そのとき当時の校長が「まるで天女のようにだ」と彼女たちを  
紹介したことが始まりである。なお、女神山先生は一度も「三人天  
女」から外れたことはない。

現在の「三人天女」

女神山 月

山中 さわ子

?????（数学の先生）



五話！！！！！

あれから更に一週間が経った。一週間もあればいろいろ案が出てきそうだが……

『やっぱりゲリラライブでしょ！！』

『何がやっぱりだ。お前は軽音部を永久消滅させたいのか』

『だって兄貴が別の方法でやるうって言ったじゃん』

『だからってゲリラライブは……』

『じゃあ〜お茶会なんてどうかしら？』

『いや、ここ軽音部だから……』

『人は来るかもな……』

……とか

『兄貴が女装して単独ライブ！！』

『……しねえ〜よ』

『とか言いつつ、女装するの嫌じゃないくせに』(ニヤニヤ)

『……』

『ケークんの女装………ドント来いです……！』

『ムギ……』

……とか

『………兄貴のメイド姿……』

『次言ったらデコピンな』

『ひッー！』

『りっちゃん、すごく怯えてるけど……』

『………慶のデコピンはタンコブできるからな……』



………とか

『澪がメイドで……』

『やらないよー!』

………とまあそんな具合であつたという間に一週間が経った訳ですよ。

澪のメイド姿………見てみたいぜ。

「はあ!入部希望者が現れた!!」

「そうなんだ!!さつき山中先生が来て教えてくれたんだ!!」

「これで廃部は回避できるな!!兄貴!!」

「本当、よかつたですね!!」

嬉しそうに3人は笑う。よほど嬉しいのか、さつきから俺の足を踏んでるのに気が付いていない……

………だが、こんな時期に入部希望者が現れるとは………よほどポワポワしている子に違いないな。

違いないが、どんな人であれ軽音部に入ってくれるんだ。俺も嬉しいわけがない。

「んで?誰なんだ?入部してくれる子って」

「1・3の平沢唯さんだよ」

「きつとこんな時期に入部してくるってことは相当ギター上手いはずだ」

「おいおい、勝手に妄想するなよ」

「ちつちつち、分かってないなあ、澪は！真の実力者とは……どんな時でも遅れてやってくるものなのさ……！」

「そうなのー！りっちゃん……！」

「……またこいつは……何言ってるんだ（汗）そして細も信じるな。律が調子に……」

「そうだぞ、ムギ……それを証拠に見ろ……！兄貴はいつも遅れて部屋にやって来るだろ……！」

「はッ……！……そうだったのね……ケークンがいつも遅れてくるのはケークンが真の実力者だからだったからなのね……！」

「えっと……細さん？」

「そうだったのか、慶……！いつも私が一緒に行こうって誘っても『先行ってて』って言うのはそういう意味だったのか……！」

「……澪まで乗せられた……！」

「きつとギターの腕前は慶と同じくらいかもな……！」

「いや、ここまでの遅れての登場……もしかすると兄貴より上手いかもしれない……！」

「け……ケークンより上手い……！」

「慶以上……はッ……！も……もしそんなことになったら……相当すごいバンドになるぞ……！」

俺を残して三人のテンションがヒートアップ。

話がどんどん膨れ上がっている。

「よあ……し……！平沢さんを失望させないために気合いれていくぞあ

……！」

「お〜!」

「……………」

「なんだなんだ、兄貴!! そんなじゃギタリストレベルの差がどんどん開いていつちゃうぞ!!」

なんかすでに抜かれてる!! あってもいないのに!! 平沢さんにあってもいないのに!!

「そつだぞ! 慶!!」

「そつよ! ケーくん!!」

…………… ったくこの子らは……………。

「…………… ギター、練習しとこ」

先に言っておく。律の言ったことを気にしてるとか、そんなんじやないから。全然違うから。

…………… うん、断じて違うから!! 失望させたらどうしようとか、抜かれてたらどうしようとか思ってもいないから!!

「みんな入部希望者が来たぞぉ〜！！！」

「本当か！」

「わぁ〜！！！」

音楽室の扉が開くと同時に律が来た。その後ろには入部希望者、おそらく平沢唯さんが律の手に引かれてやってくる。

つ……ついに来た……噂のギタリスト平沢唯！！見た目的にギターが上手そうに見えない、……だが、人を見た目で判断してはならない。それが俺の前世でのモットーだった。……たぶん。

「ようこそ、軽音部へ！！！」

「歓迎いたしますわぁ〜！！！」

「あ……えつと、その……」

「よし！ムギ！！お茶の準備だ！！！」

「はいッ！！！」

大丈夫……俺ならできる……きつとできる。

「ん？どうした？慶？」

「……主人公が強敵に挑むときって……こういう感じなのかなって思ってたさ」

「ん？？？」

「……実は私たちも今年の新入部員なんだけど……」

「先輩たちがみんな卒業しちゃって、今部員が私たち4人だけなんだ……」

「部員5人いないとクラブとして認められなくて、一週間以内にあ

と一人集まらなかつたら、廃部になるところだったんです!!」

「本当に入部してくれてありがとう!!」

「あ……あの……その」

「平沢さんって慶と同じくらいギター上手いだろ?? 憧れてるギタリストは?」

うむ……俺もそれは気になるな。同じ憧れのギタリストだったら会話も弾む。

「えっと……じっじっじっじ」

「ジミ・ヘンドリックス!!」

「おおお!!」

「いえ、じっじっじっじ」

「ジミー・ペイジ!!」

「ちがつ……じっじっじっじ……」

「ジェフ・ベック!!」

な……なんてこつた……ジェフ・ベックだと……

「そつかあゝジェフ・ベックか!!」

「どなた?」

「ロックギタリストには二種類しかいなんだ」

「……ジェフ・ベックとジェフ・ベック以外の二種類。常に新しいサウンドを追及する挑戦的なギタリスト。世界最高のギタリストの一人だ」

「ケークんとどつちが上手いの??」

「細よ。俺とジェフ・ベックを比べてはならない……俺が人間だったら、ジェフ・ベックは全知全能の神と言っていい」

「まあ……!! そんなに!!」

全知全能は言いすぎかもしれないが……

「渋いねえ、平沢さん!!ところで……」

「あの!!」

「「ん?」「」

「あのツ!!申し訳ないんですけど!実は入部するのやめさせてくださいって言いに来ました!!」

“ピシッ”

その一言で、俺たちは……部屋が凍りつくのを感じとった。

拝啓、前世の家族へ

まだまだ、危機は続きそうです……

五話！！！！（後書き）

ご指摘がありました、一卵性の件です。

前回は説明不十分で申し訳ありません。

私も一卵性のことを軽く調べたのですが、異性の一卵性になる可能性は0%ではなく、極々稀にできる。っということでした。「可能性が0でないのなら」っと思い、物語にも支障がないと考えたのでこのまま進行しようと思断しました。  
何卒ご了承いただけますよう、深くお願い申し上げます。

また、説明を省いてしまい、それによって不快に感じてしまった方に深くお詫び申し上げます。

まことに申し訳ございませんでした。

これからも素人ながら頑張って書き続けたいと思いますので、「律の兄貴やってます く拝啓、前世の家族へく」をよろしくお願い致します。

あなか15号

## 六話！！！！！！！

「さあ〜行くぞ〜！！」

今回、平沢さんが軽音部に訪れたのは、入部を取り消すためであった。どうやらもつと違う楽器を弾くと思っていたらしい。当然ギターも弾けないとのこと。（カスタネットとか似合いそう）  
やっぱり「超上手いギタリスト平沢唯」は律たちの妄想だけであった。

………言っておくが、別にホツとしたとかそんなことないぞ？うん。

だが、そうなるのかなり困ったことになる。平沢さんが入部しないと軽音部は廃部になってしまう。たとえギターが弾けなくとも、入部はしてほしかった。

（ ）（ ）（ ）何か引き留めない（ ）（ ）

この時、軽音部は一つになった！！

『毎日一緒にお菓子を食べましょう』

『なにか主旨が違ってきて……アテツ！！』

.....  
.....  
.....  
.....

『ゴロゴロしてていいから！！』

『もっとおいしいお菓子持ってきてますから！！』

つと言った具合に律たちが必死に引き留めていたが、

『ごめんなさい。軽い気持ちで入部するなんて書いたから……期待させるだけさせて……なんて謝ったらいいかあ〜』つと言って泣いてしまった。

その一言で律たちは黙ってしまった。



(マジで女装して路上ライブやるしかないか？てか俺の女装で人来るか???)

……このまま帰すのは…やっぱ両方とも気分悪いな……

『なあ〜せつかく来たんだから、俺たちの演奏聞いて行かないか？』

『え？演奏してくれるの！』

というわけで俺たちは平沢さんのために一曲演奏することになった。

曲名、「翼をください」ロックアレンジ。

「ワン、ツー、スリー、フォー！」

ちなみに俺がギターボーカルです。

“パチパチパチパチ”

演奏が終わり、平沢さんが拍手で応えてくれる。

「どうだった！？あたしたちの演奏！！」

「あの、なんていうか…すぐ言葉にし難いんですけど……」

「うんうん」

「あんまり上手くないですねー！！」

( ( ( バツサリだ〜〜! ) ) )  
( くはッ! )

やっべ……俺の胸に風穴あいたぜ……。そ、そりゃ〜まだ全体はそんなに合っていないけど……律もドラムちょっと走ってるし、漣はかなり上手いんだけど、恥ずかしがり屋な性格のせいでベース音がある限り響いてないってのがあるけどさ…… ( 紬は問題なし )  
俺?俺は超完璧……ではないかもな……

……まさかそこを見破ったのか??素人なりに……

「でもなんだか楽しそう雰囲気伝わって来ました」

「「「え?」「」」

「ん?」

「私、この部に入部します!」

“ぷに” “ぷに” “ぷう〜に”

なんと!!入部してくれるとは!!演奏してみるもんだ!……  
ところで律に漣よ。気持ちはわかるが人の頬で夢かどうか確かめるな。そして紬よ。引っ張るところがないからって耳を引っ張るな。  
お前が一番痛い。

「ばんざ〜い!」

「ワあ〜!」

「やったあ〜!」

まあ〜どうであれ、軽音部の廃部は回避できたな。

「それじゃ、軽音部活動記念に写真撮ろう!」

「あ、それ私のカメラ」

「気にしない、気にしない！よし、撮るよう！..」

“パシャ”

「あ、でも私、全然楽器できないし……あつ！マナージャーとか  
どうかな!？」

「いや、運動部じゃないんだし……」

「これを機にギターを始めたらどうかしら?？」

「でも、すごく難しそうな……」

「大丈夫だよ。兄貴が教えてくれるからさ」

「………そうだね！さっきの演奏聞いてたら、私にもできるかも  
って思ってきた！」

「………そりゃ〜よかった」

「ぐはッ!！」

「だ…大丈夫か!!慶!!！」

……翌日、昼休み

「そうですね、廃部は回避できたんですか。それはよかったですね」  
“パチッ”

「はい、おかげさまで」“パチッ”

「去年の文化祭ライブが最後になるかと思ったんですが………どうや  
ら、あと三年は大丈夫そうですねえ」“パチッ”

「女神山先生ってロックとか好きなんですか?？」“パチッ”

「変ですか?」 “パチッ”

「(うッ)……そうくるかあ(普通)……いえ、ちよつと意外だなあ  
くつと」 “パチッ”

「ふふッ、そうですか。おや?そうきますか………けど、はい以  
下詰みです」 “パチッ”

「な!」

「まだまだですねえ、田井中君」

「クッソお〜」

「ふふふッ」

“キーンコーンカーコーン”

「おや?もう昼休みが終わりですか?時間が経つのは早いですねえ  
」

「将棋やってたらあつという間ですよ。では先生、失礼します」

「あ、田井中君」

「はい?」

「軽音部。最後まで後悔のないようにね?」

「はい!………もちろんです!」

「そうですね。いい返事です」

「では、失礼します」

拝啓(前世の家族へ)

祝！！軽音部設立！！

追伸

将棋で女神山先生に一向に勝てる気がしません…

## 七話！！！！！！！！！

「すみませんねえ、田井中君。重くないですか??」

「いえ、大丈夫ですよ。女神山先生」

「やっぱり、男の子は力ありますねえ。……見た目女の子なのに

……」

「……あはは」

放課後、今回は律と澪と3人で部室に行く途中、俺は担任の女神山先生に呼び止められた。

用はプリントを職員室に運ぶのを手伝ってほしいのこと。

『私たちも手伝います』と律たちが言ったが、俺は『一人大丈夫』  
つと言つて2人を先に行かせた。

そして

……

……

……

「ありがとうございます、田井中君」

「いえいえ」

「本当に助かりました」

これまた優しそうな笑顔で言ってくれた。その笑顔を見ると、なんだが嬉しい、安心つと言った感じになり心が落ち着く。これは他の「三人天女」には感じられない。とくに最後の一人は。ていうか！  
！なんであの先生が「三人天女」に選ばれてんの?? 選んだやつ絶対DMだろ!!……まあ美人なだけどさ。

「ほかに何か運ぶものとかありませんか?」

「いえ、とくには……あ、そういえば」

「何ですか？あるなら運びますよ？」

「いや……でも……さすがに……」

「任せてください！俺、すげ〜力ありますよ！！どんなものでも運んでみましょうー！！」

「………そうですかあ〜。わかりました。では………」

部活には遅れちまうが、女神山先生の笑顔が見れるのであれば、問題ないだろう。

「ではこれを外のゴミ捨て場の前において行ってくださいね？」

「……………え？」

言葉を失うとはまさにこの状況！！俺が目にしたのはコンビニに置いてある大型のコピー機だった。それも3台。

「えっと………あの……………」

「ではお願いしますね？私はこれから会議なので、もう行きますね」

「あ……えっと……」

「それじゃ、また明日」

ふっ……………どうやら、俺はノーと言えない日本人らしい……………  
ゼッ……！

「……………わり…遅れた」

「あ！兄貴」

「ケーくん、こんにちは」

「やつほお〜ケーちゃん」

「遅かったなって……………どうしてそんな疲れてるんだ？」

「実は……………かくかくしかじか……………」

「いや、それじゃわからないよ」

なんだ、漣。……………ノリ悪いな

「コピー機3台！！」

「相変わらずのバカ力っぷりだなあ〜」

「たくましいって言葉」

「ケーちゃんすごいね！！見た目ホント女の子なのに！！」

「……………それ、褒めてる？」

「ふふ。……………はい。ケーくんの分のケーキよ」

「待ってました！！」

「なんか、『ケーくん』って『ケーキ』に聞こえるな」

「ケーちゃん、ケーちゃん！！これもすごくおいしいよ！！」

ああ〜！！俺って幸せ。

「ギターを見るに？」



「そ。唯のギターを見に行こうって話になってさ」

「何だ、唯。まだギター買ってなかったのか？」

「えへへへ」

「兄貴も行くだろ？」

「もちろんだ」

てか、俺を仲間外れにしたら泣くぞ？……ガチで

「ちなみにケーちゃんのギターはいくらしたの??」

「20万」

「……私のお小遣い40カ月分!!……部費落ちませんか？」

「落ちません」

………それで日曜日

「おそいなあ、唯のやつ」

「もしかして、まだ寝てるのか？」

「電話してみましようか？」

俺………幸せだって改めて実感

「ん?ど………どうした、慶?ケーキ食べたような幸せそうな顔してるぞ?」

「ははあ、くん………わかった。きつと溲の私服見て『かわいい、生きててよかったあ』とか思ってるんだよ」

「な!!そ………そうなのか/ / / /」

「ぷっぷっぷ。そうだよ、そうだよ。な？兄貴？」

「その通りだ！」（グッb）

「はううう／＼／＼／＼」

「澪ちゃん顔まっかあ〜」

「ところで、律」

「ん？何？兄貴？」

「お前のおニューの服も可愛いぞ」（グッb）

「ふええ！！／＼／＼／＼」

「りっちゃん顔まっかあ〜」

「は…早く唯に連絡いれよう！！」

まったく……律も澪もかわいいなあ〜もお〜！！

「もちろん、絀も可愛いぜ！！」（グッb）

「ふふ／＼／＼、ありがと。ケーくん」

ああ〜癒されるう〜

「……………慶。はやく唯に電話して」

「え？澪？」

「そうそう。早くな、兄貴」

「えつと…律？」

「は〜や〜く〜！！」

「わ…わかったよ」

「クスクスッ」

……………なんか二人が怖い

「ん？ねえ〜あれ。唯ちゃんじゃない？」

「え？…あ、ほんとだ」

「お〜い！！唯〜！」

俺が唯に連絡を入れる前に、唯が向かい側の信号に現れた。

……現れたのだが

「「「「「……「「「「」

（（（（あと数mなのに辿り着かない））））

「お金、大丈夫だった？」

「お母さんに前借させてもらった。これからは計画的に使わなきゃ。

………いつけないんだけど………」

「「「「ん？」「「「「」

「今なら買える」

「コラコラ（汗）」

「ちよっと見るだけ………」

とって店の中に入ってしまった。

「ねえ〜ねえ〜、これ遷ちゃんに合つと思つんだあ〜」

「えー！！こ………こんなの着れないよ／／／／」

「ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。」

「ええ〜そつかなあ〜。………じゃ〜ケーちゃんは？」

「いやいや、じゃあ〜って」

「そちらの商品はお客様にとってもお似合いですよ？」

「えっ？」

唯がさっきの服を俺にあててきたら、なんか店員がこっちに来た。

「お客様は身長がありますので、スラッとして綺麗に見えますよ？」

「いや、あの……」

「ご試着室はあちらになります」

「だ……だから……」

「来て見せてよぉ〜、お姉ちゃあ〜ん」

「な……!!」

律……貴様……何言ってやがる!!何が「お姉ちゃあ〜ん」だ!!

「そつだよ、着てみてよ!ケーちゃん!!」

「私も見てみたいわ〜」

唯も紬も何言って……

「漣……こいつらに何とか言ってくれよ……」

「……………私も見てみたいノノノ」

まさかの裏切り!!!

……………着てしまいました。

「ど……どっっ」

「わあ……!!」「」

「大変お似合いですよ、お客様」

「すごくかわいいよ!!—ケーちゃん!!—」

「え……そう?」

「ドント来いです!!—」

「良いよ!!—慶!!—すごく良い!!—」

「もう完璧!!—いっそのことお姉ちゃんになっちゃえよ!!—」

ちよ! バカ… そんな褒めんなって!! …… 照れるじゃねえか

「次! 次これ着てみてよ!!—」

「その次これ!!—」

「これなんてどうかしらあ?」

「私は…これがいいと思うなあ」

「お客様、これなんていかがでしょう?」

ちよ! お前ら調子に乗りすぎだつて!!— 店員さんも!!— ここは一度きつく言つて……

「あたし……お姉ちゃんにもっと綺麗になつてもらいたいなあ」

(キラキラキラッ)

「………もお……しょうがないなあ!!—」

………この後10着、着ることになりました。

「お会計、68,000円になります」

………そのうちの5着、買ってしまった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「へへ、買った買った」

「楽しかったですねえ」

「次、何処行こっか？……あれ、何か忘れてない？」

「楽器だ、楽器」

「あ！そうだった！」

「……」

「どうしたの？ケーくん？」

「お金……いっぱい使っちゃってなあ……」

「計画的に使わなきゃダメだよ、ケーちゃん！」

「………そだねえ」

「すごい。ギターいっぱい」

俺がいまだに女物の服を購入の件を後悔している間、本来の目的である楽器屋に来ていた。

「ん、選ぶ基準とかあるのかなあ？」

待つてました！！その質問！！！！

「あ。兄貴復活」

「いいか、唯？ギターは音色はもちろん、重さやネックの形や太さがそれぞれ違う。だから、女の子はネックが細くて、軽いギターがおススメだ……」

「わあ〜このギターかわいい！」

(聞いちゃいねえ〜) orz

「あ、また落ちた」

何だい！何だい！！

俺なんて……俺なんて……グスン……

「でもそのギター25万もするぞ？」

「は！？ほんとだ！！」

25万??つてギブソン・レスポール・スタンダードじゃねえ〜か。へえ〜中々いいギター選ぶじゃん。けどそのギター、女の子が使うのはちょっと重くないか??てか俺のギターより高いし……

「これはさすがに手が出ないやあ〜」

値段をみて傍から見て、悲しそうな顔をする唯。よほどのこのギターが気に入ったのだろう。

「あつちに安いのあるぜ？」

「う〜ん……やっぱこれがいいなあ」

「そういえば、私も今のベースが欲しくて……悩んで、悩んで……」

「私も中古のドラムセットが欲しくて……値切って、値切って……」

店員さん…泣いてたなあ」

「あの、値切るって？」

「欲しい物を手に入れるために、努力と根性でまけさせることだよ」「わあ、すごいですね！なんだか憧れます！！」

( ) (憧れる要素がどこに！！) ( )

そんなことを話している最中、唯はギターから視線を外さなかった。

(なんか、悩んでベース選んでるあの時の滲みたいだな)

そんな唯を見ていた俺たちは……

「よし！バイトをしよう！！」

「え！？そんな悪いよお！？」

「これも軽音部の活動の一環だよ」

「私！バイトやってみたいです！！」

ってなわけでバイトをすることになりました。



拝啓く前世の家族へく

ところで買ってしまった服……どうすればいいでしょうか……？俺、男なんです……あの後、聡に「兄ちゃん。姉ちゃんになるの？」って真顔で言われちゃったんですけど……

七話！！！！！！！！（後書き）

外伝！！聡の日常！！その1！！

オレには姉ちゃんと兄ちゃんがいる。姉ちゃんも兄ちゃんも優しくて両方とも好きだ。特に兄ちゃんはめっちゃ優しい。でも怒るとめっちゃ怖い…甘い物を勝手に食べると…

「なあ〜なあ〜！聡！今日、お前ん家行っつていいか？」

「え、いいけど」

「あ！俺も行きたい！」

「僕も！」

「うん、いいよ」

最近、友達がよく家に遊びにくる。

「僕、聡君の家行っつてみたかつたんだあ〜」

「俺も！すっげ〜綺麗なお姉さんがいるんだよなあ〜！」

え？姉ちゃんが？綺麗？

「うちの姉ちゃん、別に綺麗じゃないよ？」

「え？そうなの？」

「バカ、そんなわけないだろ！俺見たぞ！この間、聡ん家行っつたとき、トイレに行く途中廊下ですれ違っつた！」

「おおお〜！！！」

「すっげ〜綺麗で、オレに優しく『あ、いらっしやい。聡の友達？』つて声かけてくれたんだあ〜！！！」

「おおおおお〜！！！！！」

「あんな綺麗な姉ちゃんもって、聡は幸せもんだなあ」

「なあ、聡。俺たちをお前の姉ちゃんに紹介してくれよ!!」

「別にいいけど……」

「……よっしや……!!!!」

うん。どうしてそんなに盛り上がれるんだろ……そんな騒ぐほど綺麗かなあ。

あ!でも、兄ちゃんが言ってたな。他人と姉弟では印象が違っつて。つまりこういう事が。

く田井中家

「ただいまあ」

「……お邪魔します!!」

「ちよつと姉ちゃん呼んでくるから、オレの部屋で待ってて」

「おう!」

「ぼ……僕!緊張してきちゃった……」

「お……俺も……」

緊張するほどかなあ???

確か姉ちゃんは今日は早く学校終わるって言ってたらから、家にいるハズ。

“こんこんッ”

「姉ちゃん、いる?」

『ん?いるよあ』

“ガチャ”

「どうした?聡?」

「実は……かくかくしかじか……」

「ふっふっふっふう……そうか、そうか。そういう事なら仕方ない。よろしい」

「ありがとう、姉ちゃん。ところで兄ちゃんは？」

「マガン立ち読みしに行った」

「みんなあゝ、姉ちゃん連れてきたよあゝ」

「「「おおおお〜！！」「」」

「どうも、初めまして聡の姉の律です」

「「「おおおお〜??」「」」

あれ？友達の反応がいまいち……

「なんか…違う…」「ヒソヒソ」

「うん、違うね」「ヒソヒソ」

「あれゝ、おかつしなあゝ」「ヒソヒソ」

なんか友達がヒソヒソと話始めた。会話はよく聞こえないけど、どうやら思ってたほど姉ちゃんは綺麗じゃないらしい。なんだ、やっぱり勘違いか……

『ただいまあゝ』

あ！兄ちゃんが帰ってきた。



つと、評価は変わらなかった。  
兄ちゃんも姉ちゃんもほとんど同じ顔なのに変なの……って姉ちゃんは？

一方律は……

「どうせあたしは…女っぽくないよ…」

部屋でいじけていた。



かれたときは幸せすぎてヤバかった。

………待て、よくよく考えると俺は漣に異性として見られてないんじゃないかね???一緒に行動しすぎて友達以上恋人未満が確定???初恋は実らない???ただの幼馴染止まり?

「はは………(カチャツ)まさか………はは………そんなわけ(カチャカチャカチャツ……)…ぐおおおおお!!!(カチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカ×10)イテツ!!!」

手が攣りました。

「ああ〜しんどい……」

「あ、お疲れ。慶」

午前の部が終わり、みんなのところに戻るとすでにシートを広げ、お昼の準備ができていた。そこで俺に「早く気づいたのが漣だ。アレ?どうしてだろ?漣の顔みるとなんか目から汗が……」

「………グスンッ」

「ど………どうしたんだよ!?慶」

「ああ〜あ、漣、兄貴に何したんだ?」

「わ、私は何も!?!」

「大丈夫……漣はなんにもしてない………」



「じゃどうしたんだよ？」

「……………昔の俺に別れを惜しんでたんだよ」

「「?????」」

2人は意味がわからないって顔をしていた。

安心しろ、二人とも。俺も意味わからないから。

「天国じゃあ〜」

「ケーちゃんってホントにケーキ好きだね！」

「むふふふ、ケーキ命みたいなもんじゃからなあ〜」

「それにしてもムギちゃん。こんなに高そうなケーキ毎回食べても大丈夫??」

「もらい物だし、家においても余らせてしまうから」

「へえ〜（いつもこんな高そうなケーキを毎日…お嬢様!）」

「（パクツ）……………むへえ〜／／／」

「「……………（かわいい）」」

ああ〜平和だ…

……………

……………

……………

……………

そして一日目終了!…!!

「じゃ〜私は駅に行くから」

「あたしと兄貴と漣はバスだから」

「唯は歩いてか」

「うん」

「気を付けてな？」

「ありがとう！ケーちゃん！」

「じゃ、明日も……」

「ケー……」

「うん！お菓子よろしく!!」

……キ。

「……頑張りましょって言おうとしたんだけど……」

「えへへへ」

「おいおい」

「まったく」

「……」

「ん？どうした？慶？」

「えー？いや……そうだぞ！唯！しっかりしなさい！」

「えへへえへ、つい」

バイバイツと言って唯は背を向け歩き始めた。

危なかつたあゝ!!「ケーキよろしく」って言いそうになつたあゝ

!!唯のこと言えねえ!!

「兄貴、さつき『ケーキよろしく』って言いそうになつただろ？」

「ちょ!?バカ!俺がそこまで一日中ケーキのことばかり考えてるとでも言うのか!!」

「そうだぞ、律。いくら慶がケーキが死ぬほど好きだからって、さすがにそれはないよ」

「冗談だつて。あたしもそんなことは思つてないよ」

すいません…ケーキのことしか頭にありませんでした。  
そんなことを思っている…

「みんなあゝ！今日はホントにありがとう！！私！ギター買ったら  
毎日練習するね！！」

手を振りながら満面の笑顔の唯。それを見て俺たち4人は頬を浮か  
べる。

そんな笑顔を見ていると、さっきまで考えていたケーキのことなん  
て忘れてしまう。

俺はしばらく唯を見ていた。(と言っても30秒くらい)

「いつまで見てるん…っだ」「ムギユ」

「バス来たから帰ろう…ツね」「ムギユ」

「ふあれ？ふあんでふへはれへんほ？(あれ？なんでつねられてん  
の?)」

あれか？反抗期か？

二日目！！

とくに二日目と変わらんので

………省略！！！！

「二日間お疲れさま」

「「「「「ありがとうございます」」」」」

二日間にわたる交通量調査のバイトが終了した。  
そして昨日と同じバス停で。

「はい」

唯にそれぞれ貰ったバイト代を渡した。

「しっかし、一日一人八千円かあ」

「五万合わせても全然足らんな…」

やっぱり俺は別行動をしてほかのバイトをするべきだった。今さら後悔しても遅いが…

「もう2〜3回バイトするか」

「そうですねえ」

「あの…」

「ん？どしたあ、唯？」

「やっぱり、これいいよ…」

「「「「え？」」」」

「バイト代はみんな、自分のために使って」

「唯ちゃん…」

「私、五万円で買えるギター買っよ！」

「「唯」」

「あ、その時ケーちゃんギター選んでくれないかな？みんなもつい

てきてほしいんだけど……いいかな？」

「唯……いいのか？」

「うん！！一日でも早く練習して、みんなと一緒に演奏したいもん」

『一緒に演奏したい』そういった唯の笑顔は本物であった。本物、別に今までの笑顔が偽物という意味ではないけど。しかし、明らかに今までの笑顔とは違っていた。チラ見でみんなを見ると、そう感じたのは俺だけではなかったようだ。律も、漣も、紬も。みんな唯の笑顔の中にある思いが伝わった。そして、気が付くとみんなその笑顔につられて笑顔だった。

（ああ、そうか……俺も……俺たちも唯と同じだ……）

俺たちも唯と『一緒に演奏したい』んだ。

そんなわけでやってきました！！音楽ショップ『LOGIA』！！  
さてさて、俺はさっそくギター選びに取り掛かりますかねえ」

「あッ」

っと唯が声を漏らす。その視線のさきにはギブソン・レスポール・スタンダード。

「よほど欲しいんだな……」

そんなにこいつに惚れ込んでんのか…だったら…

「唯、それにしな」

「え…え!？」

「そいつも望んでるよ。お前に弾かれないって。相思相愛だ」

「で…でも…お金が…」

「またバイトして貯めればいい。みんなでやればすぐに貯まる」

「うう〜けど…」

「俺もお前がこのギターで演奏してほしいと思ってる。気持ちいぜ

え〜、好きなギターで演奏したら!!俺が言うんだ!!間違いない」

「ケーちゃん……」

「みんなも同じ意見らしいぞ」

「え?」

唯が3人を見る。

「唯、慶の言うとおりだ」

「それじゃまたバイトするか!

「あ!!ちよつと待って!!」

と急に何か思い出したように紬が声を上げた。

「どした?紬?」

「うん、ケーくん。私にいい考えがあるの」

と行って店員のほうへ向かっていった。

「どうしたんだろ?ムギのやつ」

「さあ〜?」

「……値切つてたりして……」

「まさかあゝ」

「さすがにそれは……」

だよなあゝ。一体いくらまで値切るつもりだつて話だよ……律じゃあるまいし。

値切れて20万までだな……。

あ、戻ってきた。

「このギター、5万で売ってくれるって」

「はあゝゝゝ!!」

「え!?マジで!!」

「何!何したの!?ムギちゃん!!」

「…慶、声大きい……」

え……いやだつて……

「実はこの店、うちの系列のお店なの」

「マジかよ……」

「ううゝゝ!!ありがとう!!ムギちゃん!!残りはちゃんと返すから!!」

5万だよ?25万のギターが5万だよ??25万÷5=5万だよ?

「よかつたなあゝ唯!!」

「うん!!」

「これで楽器が揃つたな」

「ふふ、よかつたですね」

5万……5万……ゴマン……ごまん……

「よし！唯！さっそく家に帰って練習するようにつて…兄貴、何財布の確認してんの??」

「えー?!いやー!今日はいくら入れたっけなあ〜って思つてさ…アハハハハハ…」

「まさか…慶…そのギターを唯より高く買つて自分のものにしてようなんて考えてたんじゃ…」

「ええ!!そ…そうなの!!ケーちゃん!!」

「ま…まさか!!俺がそんなことするわけないだろ!!変な勘繰りはやめろよな…」

「ふふ、冗談だよ。慶」

「兄貴がそんなことするなんて思つてないよ」

「ごめん…ちよつと考えちゃつた…」

「でも言い訳させて!!だつて5万だよ!!そりゃあ〜考えちゃつて…」

「では、気を取り直して…唯!さっそく練習するようにつて!!」

「はい!りつちゃん隊長!!」

「わからないところは兄貴に聞くように!!」

「はい!りつちゃん隊長!!」

「ああ〜なんて羨ましい。羨ましいけど…まあ〜いいか。唯、嬉しそつだし。それに…」

「これで、いよいよ軽音部本格スタートだ」

「そつだな」

「そつですね」



拝啓〜前世の家族へ〜

お嬢様ってホントにいるんですね。

九話!!!!!!!!!!!!!!

平凡で、平和な日常。とくに変化など起きず、日々を過ごしている。俺の前世はそんな変化のない日常が嫌いではなかったが、何か物足りない気がした……と思う。というのは、自分が本当に転生者なのかと思うくらい、最近は前世のことはあまり覚えていない。思い出そうとしても、濃い霧が頭の中を覆ってよく見えない。最初はそんな現象に恐怖心を抱いていた。大好きだった家族、友達、恋人。その人たちと過ごした時間が、実は夢だったのでは？…そう思うと怖くて堪らなかった。

怖くて堪らなかったが、慣れとは恐ろしい。今ではそんなことはない。むしろもう夢でいいんじゃないかとさえ思っている。そう思えるのは…それほどまでに、今を生きている時間がこの上なく素晴らしく、そして好きだからだ。

……ある日を除けば……ね。

とかまあ〜そんなシリアスな話はどうでもよくなって……

そんなことより紬のケーキを食べましょう!!!

「（パクッ）……むへえ／＼／＼」

拝啓、前世の家族へ

今日も平和ですww

てかこのケーキ上手すぎ!!

「じゃ〜ん!!」

「似合う、似合う!」

「様になってるなあ〜」

「唯ちゃん、かっこいいい〜!」

「えへへへ」

お気に入りのギターを購入した唯はご機嫌であった。ギターを肩に掛け、嬉しそうにギターを弾く……ふりをしている。

それしても……5万かあ〜

紬があそこまで値切ってくるとは、想像してなかったからな。驚いたもんだよ。

俺が今狙ってるアコギも紬に頼んで値切って貰おうか……

“チャリ〜ララ （以下略）”

『チャルメラかよ』

『まだこれしか弾けないんだよねえ〜』

いや、さすがにお店の人に悪い。紬は十中八九値切ってくれそうだが……（しかも嬉しそうに）お金は交通量調査のバイト代と貯金を合わせれば……ギリギリ足りないが、そこは俺の値切り術でカバーしよう。俺が値切る分は大丈夫だろう…

『唯って携帯のフィルム外してないだろ？』

『え！？どうしてわかったの！！』

今度「10GIA」行くか。

『え〜い！』

『ああ〜〜！！』

『……………なんちゃってえ〜』

『律…謝りなさい』

それしてもこのケーキ上手いなあ〜。絶対高いよなあ〜。

『ほら、唯ちゃん。お菓子だよ〜』

『いや、ムギ…さすがにそれで機嫌が…』

『（モグモグ）……………おいしい〜』

『なおったあ〜〜〜！！』

自分で作ってもこんな味にはならないよなあ〜。これがプロの技と  
いうわけか…

つうか…さっきからアイツら何してんだ？

“じゃらん”

『おお！！かっこいい！！』

“チャラリ〜ララ（以下略）”

『まだこれしか弾けないけど…』

『アンプでは練習してからだな』

『そうだねえ』

『あ！！唯、危ない！！』

“ボンツ！”

「ふぎゃー！！」

「ぐほッ！！」

くおお~~~~！！！耳が…

「アンプのボリューム下げしてから抜かないとそうなるよ…」

「早くいつてえ〜…」

「耳が…耳が…うお〜……」

「ケーくん、大丈夫??」

「兄貴はこの音が超が付くほど嫌いだからなあ〜」

「よし、じゃ〜さっそく練習しようか。唯はまずギター弾けるようにならないといけないから……慶に指導してほしいんだけど、慶…耳大丈夫??」

「ああ……大丈夫だ」

「じゃ～お願いしていいかな??」

「任せろ」

「お願いします、ケーちゃん先生」

唯が頭を下げてきた。

『先生』。そう言われた瞬間、俺の心の奥底にある熱い物が吹き上げてきた。

「……ケーちゃん?」

「慶?」

俺は椅子から立ち上がり、窓の傍で外を見て言った。

「唯………」

「は……はい!」

いつもと違う雰囲気、俺に少し戸惑う、唯。

「ギター」の道は果てしなく遠い……幾度なく挑戦者が現れたが……ほとんどの者が挫折し、去っていった……」

「……“ゴクリ”」

「つらい修行になるぞ……ついてこれるか??」

『え?何この空気?』って顔してる奴が2名ほどいるけど、無視。

「……私……私……みんなと一緒に演奏したい!!ケーちゃんみたくにかっこよくギター弾きたい!!」

「よくぞ言ったあああ!!俺が必ず弾けるようにしてやる!!俺についでこい!!」

「はいー！」

「そして、今後は俺ことは『師匠』と書いて『マスター』と呼びなさいー！」

「はいー！師匠！ー！」

俺と唯は手を取り合って意気込んでいた。

「……………慶のバカ」

「兄貴……………はあ」

「……………“ポ” / / / /」

「それでどうするんですか？師匠<sup>マスター</sup>」

「まずはコードを覚えなきゃならん。へい！漣！カモン！例のもの

……………

「え！？えつと……………これのこと??」

「イエスー！」

漣が持ってきたのは『サルでもわかるコード集』税込1200円。さすが漣だぜ。俺たちはもう心が繋がってるなー！！

「こいつは俺が使ってたコード集だ」

「へえ……………師匠<sup>マスター</sup>ってサルだったの??」

なんかこの子めっちゃ失礼極まりないこと言っただんですけどおー！！

「ちよッ……………兄貴固まっちゃったじゃん！」「ヒソヒソ”

「唯！そうじゃないよ…サルでもわかるくらい解りやすいってことだよ」「ヒソヒソ」

「そうなんだあゝ。へえゝ」

“オホンッ”

「決して俺はサルではありません。……そのコード集はものすごく解りやすく書かれてあるから、始めた当時に俺が愛用してたのだよ。決して俺はサルではありません」

「そっかあゝ、<sup>マスター</sup>師匠の原点なんだね！！」

「（二回言った…）」

「（二回言ったな…）」

「（二回言いましたね…）」

唯は『ふゝん』『なるほどゝ』と言いながらパラパラと捲っている。

「何かわからない箇所があったら言ってくれ」

「はい！！<sup>マスター</sup>師匠！！」

「お、さっそくか」

「楽譜の読み方をおしえてください！！」

「そこからかッよ！！」

「じゃねえゝ」

「それじゃあゝまた明日あゝ」

あの後、楽譜の読み方を教えて簡単なコードを教えた。



CとかDとかEとか……  
んで今はいつもの3人で下校中

「ああ〜甘い物たべてえ〜」

「部室で食べてじゃん」

「いやあ〜ほら、夕方のおやつってよくいうじゃん?」

「それ、兄貴だけだろ??」

「そんなわけで…ミ ド行きましょう!!」

「兄貴の奢りねえ〜」

「ちツ……しょうがねえ〜」

「やり〜! 漣、兄貴が奢ってくれるって!」

「あ、ごめん。今日はまっすぐ帰るよ」

「え?どして?」

「中間テストが近いからさ。そろそろ復習とかしとかないと。赤点なんてとる訳に行かないからさ」

「そうか…中間のこと忘れてたぜ」

「でも、まだ2週間近くあるよ?」

「中学と違うんだから、今のうちにやっとなないと…」

ふぬ…確かに…

「それもそうだな。今日はまっすぐ帰るか」

「ええ〜〜!!」

「うつせなあ〜…そんな大声あげるなよ」

「兄貴奢ってくれるっていったじゃん!!」

いや言っただけどよ…

「さすがに俺も何も勉強とかしてないし……軽くやっとなないと」

「兄貴は勉強できるから問題ないって!!ねえ〜行こうよあ〜」

「お…おい、律。慶をあまり困らすなっ…」

ん〜。ミ ド行く時間ぐらいはあるか??

「わ、わかった。んじゃドーナツは持ち帰りにしよう。それなら遷もいいだろ??」

「え?あ…うん。それなら私は別に…慶が奢ってくれし」

あ、やっぱり奢んのね…

「よ〜し…!んじゃちっそへミ ド入レシユ〜!…!」

拝啓、前世の家族へ

俺の中でストロベリーリングとオールドファッションは鉄板です!!

九話!!!!!!!!!!!!!!（後書き）

もっといいことミ〇タードーナツ

ミ〇ドに入ると必ずストロベリーリングとオールドファッションにさらにアイスティーを頼む、あなか15号です。

最近なかなか執筆が進みません。ちよつと苦勞気味です…

3年の文化祭の劇とかラストライブとか最終回とか脳内で完成しているのですが……

そこまで到達できるのがかなり先の話だなア〜と……何とか完結させたいです。

遅い更新ですが、必ず完結させます!!

次回もよろしくお願いします。

## 十話！×10

試験しけんとは、被験者または試料の能力や性質を測定するために行う行為のこと。検査けんさ、テストとも呼ばれる。

試験の成績は、普通、採点をして得た得点で表される。合格/不合格の判定も、いったん得点を出して、それにより判定することが多い。

学校でいわれる試験については、幼児、児童、生徒、学生などの学習活動、学業の成果を検査するための手段を指すことが多い。

by Wikipedia

「ふう〜、こんなもんだろ。あとは当日に軽く復習すれば……ってもう21時か」

中間テスト1週間前となり、すべての部活が活動休止となり、全校生徒が勉強に励んでいた。それは、軽音部も例外ではなく、その一員である俺もテスト勉強をしていた。今日はテスト二日前の土曜日だ。

「う〜〜〜〜んツツツぷはあ〜…ああ〜糖分たりねえ〜…」

俺はテスト勉強に区切りをつけ、大きく伸びをする。休みの土曜日をテスト勉強に消費したから、体の所々錆びついたように固い。主に首や肩など……

「……………今日一日は高校受験並みに勉強したな……………」

はつきり言おう。俺は勉強ができる。かなりできる。得意科目は国語・数学。超得意科目は英語だ。国・数は90点以下はとったことないし、英語は常に98点以上。TOIECも8割以上とれる自信がある。先の三教科ほどではないが、社会も理科も問題ない。俺に不得意科目はない。

…が俺は天才ではない。俺はただ勉強ができるだけ。てか、勉強しないと悲惨な目に合うのは間違いない。それに俺が勉強できるのは…おそらく俺が転生者であることが関係していると俺は考えている。天才はホントに天才なのだ。……上手く説明できないが。まあ、そんなことどうでもいいか……

「さて、明日はどうするか…みんな勉強してるだろうし……一人でぶらりと出かけるか、ギターを弾くか、絵を描くか、将棋の棋譜を並べるか、小説書くか、本読むか…」

俺って結構多趣味だな。

“コンコンツ”

『兄ちゃん、入っていい?』

明日のことを考えていたらノックする音が聞こえた。

「ああ、いいぞ」

“ガチャツ”

「失礼します」

入ってきたのは弟の聡だ。手には何やら参考書、または教科書らしき本を持っていた。

「兄ちゃん、今大丈夫?」

「ああ、大丈夫だよ。ちょうどテスト勉強に区切りをつけたところだ」

「ホント？それじゃ勉強見てほしんだけど…いい??俺、月曜日テストあるんだ」

「へえ、中学も月曜日に中間か」

「うん。ホントはもつと早く兄ちゃんに見てほしかつただけど…」

「兄ちゃんの学校も同じ時期にテストあるって姉ちゃんから聞いてて」

「邪魔しちゃ悪いと思ったのか？」

「うん」

「ああ、わくわくわくわく！ウチの弟めっちゃ可愛いですけど！！こんな可愛い弟もつてお兄ちゃん幸せもんだあ！！！！！！生意気なこと言わないし、素直だし、兄思いだし…ホントすばらしいな！！」

「一人でやってただけど、どうしてもわからないところがあった…」

「兄ちゃんに任せな。んで、どんな教科なんだ？」

「英語と数学」

「すげ〜任せろ。すべて兄ちゃんに任せろ…余裕で85点以上とれるようにしてやる」

「おお〜！！」

「ちなみに担当の先生は誰だ？」

「英語は玉葉先生たまはで数学は空言先生くうげん」

「たま先とそら先か…よし…」

「だったら、90点はとれるな。アイツらのテストの傾向パターンはすでに読み切っている」

「きゅ…90点…！！」

「ぶっぶっぶっぶ…3時間…いや、2時間でマスターさせるぞ！！」

「お願いします!」

.....

「ありがとう! 兄ちゃん!」

「あとは俺が作った出題予想問題をちゃんと解いていけば、当日は余裕だろう」

「うん!! それじゃ〜お休み、兄ちゃん」

「ああ、お休み」

聡はテスト勉強を終え、自分の部屋に戻って行った。聡は中々優秀な部類に入るため、予定していた時間より早く切り上げることができた。

「さて、俺も寝ますかな……」

“プルプルプルッ”

つとケータイから着信音が……

画面を見ると秋山澪の名前があった。

「もしもし?」

『あ、慶? こんばんば。夜遅くにごめんね』

「別に大丈夫だよ。どした??もしかして寂しくて電話しちゃったとか??」

『ひえ!?!?…な、何言ってるんだよ!?!?』

「はっはっはあゝ、すまん、すまん」

『もおゝ…バカ慶…/ / /』

俺の本気度7割の冗談に、漣はちよつと慌てた感じであった。まったく可愛い反応しやがる。

それにしても、この反応…もしかしてちよつとは俺も意識されてるってことか??いつそのこと明日デートに誘うちまうか??

…いやまて!!あまり期待を持ち過ぎはダメだ…前世でそれでかなり痛い目みた気がするからな…それに、2人でよく出かけることもあるから、今更デートと認識されない確率の方が高い。…ちきしょう、道は遠いぜ

『慶?どうしたの??』

「あ、いや…なんでもない。で?どうしたんだ?」

『あのさ…えつと…明日、一緒に勉強しない??』

「テスト勉強??」

『うん。慶って教えるの上手だから、私の勉強見てくれるといいなあゝって思ってる…ダメっ…かな??』

ダメなわけがなかるうに!!

「ああ、いいよ。俺に任されよう!!--」

『ホントに!!ありがとう!慶!!--』

電話越しから嬉しそうな声が聞こえる。

まあゝぶつちやけ、漣は勉強できるから俺が教えることって、たぶんあまりないだろうけどね。



「じゃ〜明日、俺ん家に来いよ。俺の部屋でやるっぜ」  
『うん!〜!』

「じゃ〜10時くらいでいいか?？」

『大丈夫だよ!』

「OK。んじゃ明日、待つてるぜ」

『うん、ありがとう!それじゃ、明日ね。お休み、慶』

「ああ、お休み、漣」

俺はケータイを切る。

「さて、俺も寝ますかな」

「さて、はじめますか」

「うん」

翌日、俺と漣はさっそく勉強を始めた。漣は俺の向かいに座った。

「昨日一人でやっててわからない所があったんだけど…」

「ん?どこ、どこ?？」

「ここなんだけど…」

漣がノートを広げ俺に見せてきた。

なんともまあ〜綺麗で見やすいノートなんでしょ。

「ああ、ここは…」

「うん…」

「つまり……ッ!」  
「うんうん」

なッ! さっきまで向かい側に座ってたのに、俺の横に移動している!! 寄り添うように!!

しかも、今日の溼の服装は、結構胸元が開いてるから谷間らしきものが見えるんですけど!!!!

「ん? 慶?

「はッ!」

「どうしたの??」

「いやなんでもない!! 全然なんでもないですよ~~~~!!」  
「クス、変な慶」

集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中……  
……集中!……!

俺!! すっげ〜集中!……!

「そうか! なるほど……」

「わかった??」

「うん。よくわかったよ!」

ふっふっふっふ……俺の集中力すげ〜ぜ……鼻血出たら  
どうしようかと思ったけど……何とかセーフだ……もう、密着されても  
大丈夫だろう。

「慶つてやっぱ教えるの上手いな！」

ドツツツッキュン

…漣よ……そんな可愛い笑顔で俺を見てはいけません……俺をキュン死させたいのですか！！

「ほ……他に、分らないところある？」

「えっと、ここがちよっと……解けるんだけど、どうしてこうなるか解らなくて……」

ふむふむ……ううは、

“バタンッ”

「うおッ！」

「ひゃッ！」

いきなり部屋の扉が開かれて、俺と漣は驚いた。扉の方を見ると、律がいた。

てか、漣はビビッて俺に抱き着いてます……!!相変わらずいろいろやわらかいです……!!

「り……律？」

「ど……どした？律??」

「……………兄ちゃん、漣」

俺は即座に嫌な予感がした。律は普段、俺のことは『兄貴』と呼んでいる。しかし、これは意識して呼んでいるらしい。本気で嬉しいとき、楽しいとき、困ったとき、苦しいとき、悲しいとき、怒った

ときなどには『兄ちゃん』と無意識に呼んでしまう。  
ほら、アレだ……家では『パパ、ママ』って呼んでるけど、外では意識して『お父さん、お母さん』と呼んでいる。けど、焦ったときなんかでつい『パパ、ママ』って呼んでしまった、アレだ。  
そして今回、どんなときかというところ…表情は俯いててわからんが、雰囲気から察するに…

「勉強教えてえ~~~~~!!!!!!!!」

本気で困ったときのようです。

拝啓、前世の家族へ  
……女の子って……柔らかい。

十一話(！×10)＋！

結局、漣とのラブラブイチャイチャ勉強会(仮)はすることはできず、律のテスト前日一夜漬け勉強会となった。

腹いせに適当に教えようと思ったが、妹が赤点なんて俺自身気分悪いからちゃんと教えることにした。

まあ〜こいつは勉強の仕方がわからないだけだから、ちゃんと教えられるようになる。……たぶん。

しかし、今回は漣も先生役になったから効率よく教えることができた。

そして翌日からの中間テストは無事に終わった。

「終わったあ〜！！」

「慶の予想問題はバツチりだったな！」

「俺の予想問題はただの確認だ。漣の実力だよ」

「そ…そうかな／＼」

「私は難しくて大変だったわあ〜。ケーくん、私にも今度勉強教えてくださいなね」

「ああ、構わないよ」

けど、紬も漣と同じで自分で勉強できる人間だから俺の助けはおそらくいらないだろう。

助けが必要なのは……

「クラスで一人、追試だそうです…」

ここに一人……

……そして12点の答案を見せんでいい。こっちも悲しくなる。

「（うわあ…）」

「大丈夫よ！今回は勉強の方法が悪かっただけじゃない？」

「そうそう！ちよつと頑張れば追試なんて余裕余裕！」

紬と律が赤点の唯に励ましの言葉を贈る。けど、ちよつと苦しい励  
ましたと思うぜ？12点つて…ねえ…

「え？全然勉強しなかったけど？」

「励ましの言葉返せコノヤロウ」

「ごもつとも…」

「なんで勉強しなかったのさあ？」

「いやあ、しようと思っただけ…。なんか試験勉強中ってさ  
勉強以外のことに集中できたりしない？」

「ああ、それあるなあ…部屋の掃除片付いたり…」

「それで、勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなっ  
ちよつて…全然勉強できなかったんだよね…」

「はは、なんか唯らしいな」

「え？そうかなあ／＼／＼」

ああ、ごめん。別に褒めてないや。

「でもね！！おかげでコードほとんど弾けるようになったよー！！」

なんて清々しい笑顔とピースなんでしょ。100点あげたいね。

「その集中力を少しでも勉強にまわせば……」  
「むう〜…そういうリツちゃんはどつだったのさ!」  
「ん? あたし? …… 余裕ですよ! この通り!」

「ジャジャーン!」という効果音が流れてきそうな見せ方で唯に自分の答案を突きつけた。

「こんなの……りっちゃんのキャラじゃないよ」

「オーホホホ! あたしのような人間になると、なんでもそつなくこなしちゃうのよ!」

「りっちゃんは私の仲間だつて信じてたのに……」

まるで捨てられた子犬のような目で律をみる唯。

しかし、律よ……

「「テストの前日に勉強わからないうって泣きついてきたのはどこの誰だつて?」」

“ギクツ”

「あ! バラすなよ! 二人とも!」

「それでこそりっちゃんだよ!」

「赤点取つた奴にいわれたくねえ!」

お? 今度はいい顔になつたな。

「しかし律よ。お前、俺と溻に勉強見てもらつておいてその点はなんだ?」

「え…兄貴?? …… えつとでも! 悪くない点数だよ! むしろいい点!」

「どうなんだ?」

「えっと…その……」

「お前…まさか俺が作った予想問題をやらなかったのか？」

「……………」

「やらなかったのか？」

「……………はい」

まったくこの子は…… 今回のテストは俺の予想問題が約7割から8割程度、同じ様な問題だったからな。最低でも80点の点数。さらに俺と澪が教えたから95点以上は確実に取れるはずなのである。

「澪ちゃんとムギちゃんとケーちゃんは何点だったの？」

俺か？俺はだな…

「はい」

「ほれ」

「ん」

唯が俺たち三人から答案を受け取る。律も見ようと、横から覗き込むように見ている。

「おお」

「つえ…」

答案を見た途端に唯と律は驚きの表情となる。だが、同じ驚きでも意味は異なっていた。

「つッ……………つッ」

「へえ」

「ほ…ほら！あたしはポカミスしちゃったし…」



「うんうん」

「ミスがなければこれくらい……」

「……………」

「お願いだからなんか言ってみてえ……」

ちなみに俺は満点です。

……………べつの日……！

「あ！今日は羊羹」

唯は遅れて部室にやってきて、羊羹を見るなり嬉しそうに自分の席に着く。

和菓子はやっぱりお茶だよねえ〜ん〜ん、お・ち・つ・く……………  
いつもうるさい律も静かだし、お茶はすごいねえ〜。

……………ズズズズズズウ……………ツプハあ……………ホツ

「……………モグモグ……………追試の人は合格点とるまで部活動禁止だって……………  
ハグハグ……………」

そう、例え今唯が爆弾発言しても今の俺たちは全然動じない。羊羹  
うまつま……………

……………は？

「……………ええ……………」

「……………ムグツ……………」

よ…羊羹が…喉に…!!

「結構厳しいなあ」

「そしたらここにいるのも不味いんじゃない？」

お…お茶……なッ!!空っぽ!!

「大丈夫だよ。お菓子食べに来てるだけだし」

だ…誰か…お茶…を…!

「あ!そっか!!それなら安心だあ」

ちょ…マジで…息が…

「ってなんでやねん!!」

「ぐえ」

“パンパンパンパン…”

「もしも唯が部活できなくなったら…私たち4人だけになっちゃうんだよ？」

「はッ!!ひよっとして…」

……も…だめ…

「……部員数が足りなくなる」

「それで……廃部…」

バタリ……。

「……追試はいつあるの?」

「1週間後」

「1週間後かあ〜」

「それだけあれば、毎日ここに来て大丈夫だよねえ〜」

.....。

「それだけしかないのー!!」

「追試に受からないと、このクラブ自体なくなるかもしれないんだよ?」

「そっだよねー!!みんなと部活続けたいから、私頑張るー!!」

「ん〜」

「どうしよう、慶…って慶?」

「ケークくん?」

「兄貴?」

「ふえ? ケークちゃん?」

返事がない…ただの屍のようだ…

「に…兄ちゃんー!!」

「慶ー!!しっかりしろー!!」

「待ってー!!ケークくんが何か言ってるー!!」

「ん?」

「お…お茶…を…」 “ピクピク…ピクピク…”

「お茶あ〜〜〜!!」

「慶い〜〜〜!!お茶だあ〜〜!!」

「漣ちゃんー!りっちゃんー!落ち着いてー!!そのお茶まだ…」

2人は紬の静止も聞かず、俺の口にお茶を入れ…もちろん激アツ

「\$%&`'( )`&%\$#“#\$%&`'( )=」

あまりの熱さで声が出ません。  
そして……

チーン……

俺の意識は完全にブラックアウト……

「兄ちゃん……ん!!!」

「慶iiiiiiiiiiii!!!」

拝啓、前世の家族へ、

%&、（）（）（）&%\$#%&、（）（）（）&、&%\$#  
\$%&、（） “!#

十二話(！×10) + ！(前書き)

書き続けるって難しいと改めて実感……

十二話（！×10）+！！

唯の追試まで…あと6日……

今日のお菓子はフルーツたっぷりプリンです。

「……なんか唯がないと張り合いないな……」

「その割にはよく食ってるな」

「へへえ…それとこれとは話が違いますワ」

「唯…ちゃんと勉強してるかな…どうかな？慶？」

「ふあいじょうぶある…ふいをふいんひろ……」

「慶……口の火傷は私と律のせいだから本当に申し訳ないと思うんだけど……何言ってるかわからない……」

がぐん！！

唯の追試まであと……3日！！

今日のお菓子はカステラ！！3時のおやつは文堂！！

「唯…勉強進んでるはずだよね……」

「……ん…進んでるかな……」

「……どう思う？慶？」

「……カステラ美味しいな……」

「ちよつと慶！」

「すまん」

ん〜唯の勉強ねえ〜…  
俺は唯の勉強している姿を想像してみた…すると不思議なことに  
ベッドの上でコロコロ転がりながら漫画読んで、お菓子食べてる姿  
しか思い浮かばなかった…  
……なんでだろ

「やっぱ…心配になってきた…」

「お…同じく……」

どうやら律も同じ想像をしたらしい…さすが双子…!

「今晚、励ましのメールを送るのはどう?」

「お!名案だな!」

「うん!私もやってみるよ!」

「さすが紬!」

だてに美味いお菓子持ってきてないぜ!!

帰宅後…

「やて…なんて送らっ…」

ここは無難に『頑張れよ』かな?

「いや、俺たちは仲間なんだ！！そんな頑張れの一言で済ましてい  
いはずがない！！」

そういえば…律が『唯がないと張り合いがない』って言ってたな…  
うん。確かにその通りだ！よし…なら…

『平沢 唯様

あなたがいなくなつて、軽音部がとても寂しい感じがします。そん  
な風を感じるのは…あなたの元気で明るい声に僕は、とても惹かれ  
ていたんだと思います。だから…だから絶対帰ってきてください。  
ずっと待っています。

田井中 慶』

「……………うん…なんか違うよね……………」

『お前…ちゃんと勉強してんのか??ちゃんと勉強しないと、ダメ  
なんだからな?』

……………べ…別にお前の心配なんてしてねえからな!!勘違いすんな  
よ……………ばか』

「……………え?何この下手なツンデレ……………」

……………こうか?……………いや、もっと…だが…これじゃ伝わらない



んじゃ……

……30分後

『しっかりな。油断すんなよ?』

「……これでいいや」

送信!!

追試前日……

「というわけで、澁ちゃん、ケーちゃん助けて!!」

何がというわけだ……

「へ!勉強してきたんじゃないの?」

「……」

「ヒック…グスン……できなかつたあ」

Wao!

「ええ!!」

「合格点とれなかったら…私たち…」

「それだけは絶対したくない!!」

涙目で必死に訴える唯。しかし……なあ…

「ん……前日だしなあ…もうこうなったら…」

「うん…よし!!今晚特訓だ!!」

「ホント!!」

唯の顔から光が取り戻す。まるで俺たちを神さまと崇めそうな目だ。

「兄貴と溇に教えてもらえば、確実に合格点とれるぞ!!」

「いやあ…/ /」

「そんなことは…なあ…/ /」

今日の晩御飯は律の好物にしてやろう!!

「上手いんだぜ!!一夜漬け教えるの!!」

「普通に教えるよ!!」

……全品嫌いなものに決定…

俺たちはさっそく唯の自宅で勉強することとなった。

なんでも唯父は出張でいなく、唯母もその付添でないとのこと。

「あれ？でも妹がいるって言ってなかった？」

「うん、妹は帰ってきてると思う」

「それだとお邪魔にならないかしら？」

唯の妹か……

……あれ？なんか唯が二人いる！！

みんな同じ想像したのだろう。思わず笑みをこぼしてしまった。

「てか…今更だけど男の俺が行ってもいいのか？」

「大丈夫！！ケーちゃんは私の友達だもん。だから全然大丈夫だよ！！」

友達か…嬉しいこと言ってくれるじゃん！！

そして平沢家到着！！

「みんな、上がって上がって」

「……お邪魔します」「」「」

家に入ると玄関は掃除されていて綺麗だった。靴もきちんと並べられている。

失礼かもしれないが、唯の家だからもつと靴とか散らかってるイメージがあつたから、イメージの違いに少なからず驚きだった。

『あ！お姉ちゃん、お帰り』

すると奥から唯の妹さんらしき人物の声が聞こえてきた。

「あれ？お友達？」

……唯の妹だよね？

「初めまして、妹の憂です。姉がお世話になってまあ〜す」

……あれえ〜???妹???なの？

すると即座にスリッパを取り出し、俺たち来客分のスリッパを並べる。

「スリッパをどうぞ」

(( )) (( )) (( )) (( )) (( ))

この時俺たちはシンクロ率が100%だった。

「…………アッ」

「んっ」

俺がスリッパをはこうとしたとき、一瞬だけ妹さん…憂ちゃんと目が合った。すると、何かに気づいたように小さく声を上げた。

「……………」

「……………(汗)」

何やらじ〜っと見られてるんだが……………あ、そうか……………

「ん？どうしたの？憂？」

「あ、お姉ちゃん！」

「ああ！もしかして『この人、女の子なのにどうして男の制服着てるんだろお〜』って思ったんでしょ！？」

「え！？」

「うんうん、わかる。わかるよ。憂！私もケーちゃんは女の子に見えたもん！！」

いや、いくらなんでも男の制服着てたら女には見えんだろ…

「唯、たぶん男の俺がいることに違和感があるんだよ」

「え！！そうなの！！憂！」

「えっと…私は…」

「やっぱ、俺は帰ろうか？」

いくら友達でも女の子の家に上がるのは…

「そんな！！帰らないでください！！」

「え？」

「憂？」

俺が帰ろうとしたとき、意外にも引き留めたのは憂ちゃんだった。

「お姉ちゃんのお友達なら大歓迎です！」

「いやあ〜姉妹でこうも違うもんかねえ〜」  
「え？何が？」

その後、結局俺は唯の部屋に招かれた。

「妹さんに、唯のいいところ全部吸い取られたんじゃないの？」

「ヒド〜イ〜！」

「律も慶にいいところ全部吸い取られてると思う」

「ヒドいぞ〜！！凄〜！」

“コンコン”

「あの〜、よかったらみなさんお茶どうぞ。買い置きのお菓子で、  
申し訳ないんですけど…」

(( )) (( )) 本当にできた子だあ〜 (( )) (( ))

ホントに吸い取られてる気がする。

「憂ちゃんは今年生？」

「中3です」

ほう〜一つ下か。

「受験生ですね」

「どこ受けるか、もう決めてる？」

「んん〜…できたら、桜ヶ丘に行きたいんですけど……私の学力で

受かるかどうか……」

「お姉ちゃんでも受かったんだから、大丈夫だよ」

「おいで、おいでえ〜」

……そうだよなあ〜唯や律でも受かったんだから、大丈夫だろう。

憂ちゃんは勉強できそうだし……

……てか……なんで男子は俺だけしか受からないんだ？

「お姉ちゃんに勉強教えてもらえばいいんじゃない？」

「はは、それはいいんじゃないか？律も俺から勉強教わってたしな」

俺と漣の一言で唯は自信ありげに頷く。すると憂ちゃんはちよっと困った風な表情となり……

「それは……自分でできるから……」

と言って目をそらすのであった。

「あはは〜。断れたぞお〜」

「ええ〜！！なんでなんでえ〜」

そりゃあ〜……ねえ〜

「でも……でも！お姉ちゃんはやるときはやる人です！！」

「いやあ〜／＼／＼」

( ) ( ) ( ) やっぱりできた子だあ〜 ( ) ( ) ( )

こんな妹が存在するとは………ってまただ。今度はチラチラと俺を見てくる憂ちゃん。

「あの…俺の顔になんかついてる？」

「え！？えっと…その……し！失礼します！！！」

憂ちゃんは逃げ出した。

はれメタルのごとし！！！！

「慶…何したんだ？」

何したって言われても…

「きつとケーくんが女の子みたいだからよぉ〜」

「「「「あぁ〜なるほど」「」「」」

おいおい

「俺は取り敢えず、予想問題作ってるから…漣と紬で唯の勉強見といてくれ」

「うん。わかった」

「任せて、ケーくん」



「唯。机借りていいか？」  
「いいよあ〜」

それじゃ〜、始めますかね〜。

「えっと………「うづで………「うづが重要………」

『ふああ〜〜〜………』

「………「ここもだなあ〜」

『あ、漫画ある』

「………」

『あはははあ〜』

「………」

『兄貴、兄貴！この漫画面白いよ！…！』

「………おい」

まだ10分しかたってないのに………うちの妹は…

「はあ〜…唯、トイレ借りていいか？」

「うん、いいよあ〜。階段下りて右だよあ〜」

俺は唯の部屋をでて階段を下りる。もちろん、律への制裁は忘れていない。漣の拳骨と俺のデコピンを食らって大人しくなったはず。

「あッ」

「おっと」

俺がトイレに入ろうとしたとき、（おそらく）リビングから出てきた憂ちゃん遭遇。

さて、どうしよう〜…

- 1、 ニッコリスマイル
- 2、 唯に似てかわいいね
- 3、 俺の妹にならないか？
- 4、 以前どこかであつたかな？
- 5、 無言

いや、どう考えてもこの中だと1しかないだろ……2は辛うじてセーフだけど……3は完全にセクハラだろ……4は何のドラマですか……5は論外……

「あ……あの！」

「以前どこかであつたかな？」

「え！？」

おいしいいいいい！！何で4！！なぜ4！！俺はどこか心の中でドラマ的展開を望んでのか！！！憂ちゃん引いてるやん！！！早く弁解せな！！

「今のはジョー……」

「やっぱり、あつたことありますよね！！」

「……………へ？」

「よかつたあゝ。ずっと気になってたんです」

「えつと……………？」

「確か……去年の夏ですよね？もう元気になりましたか？」

去年の夏？一体なんこと……

「あれ？違いました？すごい夕立が来た日だったと思っんですけど……日にちは……8月20日です……！！」

「なッ!」

「私、あの後すごい印象に残ってて、よく覚えてるんです!」

……8月20日……俺と律の誕生日前日の日だな……まさか!」

「そっか……君が……あのときの……」

「はい!そうですよ!すごいです。まるでドラマみたいな再会ですね!」

「……ホントだね……」

本当にドラマ的な展開だな……あの時の女の子が唯の妹だったとは……

8月20日……それは俺の前世での誕生日……でもあり……

俺の死んだ日……

そして

俺の前世の記憶がこの日だけ完全に蘇る日

俺が……絶望する日



十二話 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (後書)

十三話(！×10) + ! ! ! (前書き)

三人天女の最後の一人が登場



十三話（！×10）+！！！

『私、あの後すごい気になってたんです…慶さん…すごく悲しそう  
な目をしてたから…』

まさかあのお人よし女の子が唯の妹とは……  
いやなところ見られたなあ……

「ケーくん、お茶のおかわりいかがかしら？」

「あ、いただきます」

8月20日……俺の前世の誕生日にして、前世の命日。

何故だがわからないが、その日限定で俺の前世の記憶が鮮明に脳裏  
に映し出される。

そうになると俺はテンション最低になり、ひどく落ち込む。『俺…な  
んで生きてんだろ…』『あいつら…元気なのか…』『…死のう』  
てな感じで。厄介極まりないのだ。

更にその次の日が俺と律の誕生日なのことも、厄介さを増幅させて  
いる。律は誕生日前日ということもあり、かなりテンションが高い。  
それに比べて俺はテンション最低。

律、テンション最高

兄・慶の姿見る。

テンションあげよつとする

慶、それに乗れず冷たく突き放す

律、泣く。親、慶を怒る

慶、『…黙ってる』って言って家を出るか、部屋にこもる  
親と律。超心配する。

翌日、慶、『やっちゃまったあ〜』って後悔する。

てな感じだ。

「去年は格別にひどかったなあ〜……って?」

なんか、俺の太ももが温かい?もとい、熱い。

「あつちいいいいいいいいいいいいいいいい!!」  
「はっ!!ごめんなさい!!ケーキくん!!」

俺はあまりの熱さに飛び上がってしまった。

「!?!?!ごめんなさい!!ボクっとしてて!!」

どうやら紬がさっきからずっと俺のカップに紅茶を注いでたらしい  
…カップから紅茶がドバドバとこぼれている。  
てか……

「お前らソワソワしすぎ!!ちょっとは落ち着け!!」

今日は唯の追試の返却日。みんな唯の結果が気になって仕方ない  
様子だ。

「でも……」

「軽音部の存亡がかかってるし……」

「いや、分かるけどよ……少しは信用しようぜ。唯なら大丈夫だ」

「ん……」

「……」

「……」 “ボ〜”

この子たちは……まあ、俺も心配ないとは言いきれないけど……

“ガチャ”

「お？」

「唯！」「唯！」

「唯ちゃん！！」

噂をすればなんとやら……

「ど……どうだった！！」

「だから、漣……落ち着けて……」

もっと冷静に聞いてあげなきゃ唯もどどっっちゃうたる？

「で？どうだったんだ？」

「……」

「お……おい、唯？」

「ケーちゃん……漣ちゃん……」

あれ？なにこの雰囲気？

「ど……どどっっちゃん……」

「マジ？」

「え！ダメだった!？」

おいおい、マジか…マジでダメだったのか!!

「百点取っちゃった…」

( ) ( 極端な子おおおおおおお!! ) ( )

数日後……………

唯の追試事件が解決してしばらくたった。7月も半ばに入り、いよいよ夏本番の季節って感じた。…………暑い。

「あつち〜…………さつさと水分探らんとミイラになりかねん…………」

俺は部活に行く前に自販に寄っていた。

夏といえはやっぱコーラでしょ!!

俺は自販に金を入れ、コーラのボタンを…………

「ご苦労“ピッ”」

「…………へ？」

突如、俺の後ろから手が出てきてコーラの隣のアクリのボタンが押された。

「なッ!！」

「いやあ、生徒にジュースを奢ってもらえるなんて、先生感激だなあ」

「何すんですか!！海原先生!！」

俺の後ろにいたのは、桜ヶ丘の『三人天女』の一人。海原 乙姫先生だ。

「うるさい黙れ。……………ゴクッ……………ゴクッ……………」

「つてもう飲んでるし!！」

「つぶはあ」

「……………」

『ぶはあ』 つじゃねえよ!！もう小銭残ってないんだぞ!！

「ん?なんだ田井中。私の飲みかけがそんなに飲みたいのか?」

誰が飲むか、くそ教師……………

「ぐはッ!！」

「誰がくそ教師だ」

「何も……………言つてない……………」

「顔に書いてあった」

訂正!！この不良鬼暴力教師!！みぞおちを本気で殴る!?!ふつつ!！

つつかなんでこの先生が「三人天女」に選ばれてんの!！クールでお姉さま的でかなり美人だけど、本性はただの暴力女ですよ!！

「なんでも生徒は私に叩かれたいらしいぞ?」

「だから俺は何も言っていないって言ってるでしょ!!」  
「だからお前の顔に書いてあるんだって」

つつか叩かれないってなんだよ…『お姉さまあゝ私をたたいてえゝ』  
的なノリか!?おい!

「先生!俺は叩かれたくないです!いえ、殴られたくないです!!」  
「ところで、田井中よ」

聞いてねえゝ!!

「平沢の追試の勉強、お前が教えたと聞いたのだが本当か?」

「え?ええゝそうですけど…」

「チツ…もっと難しくすればよかった…」

どういう意味だ?

「あの……………」

「せっかく男子生徒を入学させないように、入試の数学の問題は海  
星高校以上の問題にしたのに…………男子の問題だけ」

「男子生徒が俺しかいないのアンタのせいか!!!!」

「あ…………聞かれたか?」

「聞こえるように言ったでしょ!!」

海星高校って言ったなら全国最高に頭のいい高校じゃないかよ!!!!ど  
うりで超難しいと思っただよ!!

「難しいと言っておきながら、貴様は数学の点数満点だったろ」

「い…いやゝノノノ」

「だから私の計画を邪魔したお前が嫌いなのだ」

あなたが俺にしてきた数々の嫌がれせはそういう事だったのかよ!!

「その通りだ」

「自信満々に言わないでください……………」

はあ……………

「でもなあ〜田井中……………」

「何ですか？」

「お前が女の子になれば、許してやるぞ?」

あれ???俺が悪いの???

俺は海原先生と別れ、部室に向っていた。

「結局、金払ってくんなかったし……………」

おかげでピン札の千円札を崩す羽目になったし……………

「……………なんか疲れちった」

早く部室に行つて紬が持つてきたお菓子を食べなければ!!

スイーツが俺を呼んでるぜ!!  
俺は勢いよく部室のドアを開けた。

「合宿をします!!」

そして溲に勢いよく宣言されました。

拝啓、前世の家族へ  
三人天女が全員出ました!!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2091t/>

---

律の兄貴やってます ～拝啓、前世の家族へ～

2011年6月7日19時31分発行